



南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

県営畑地帯農道網整備事業西之地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

龍庵坂・今平遺跡

りゅう

あん

ざか

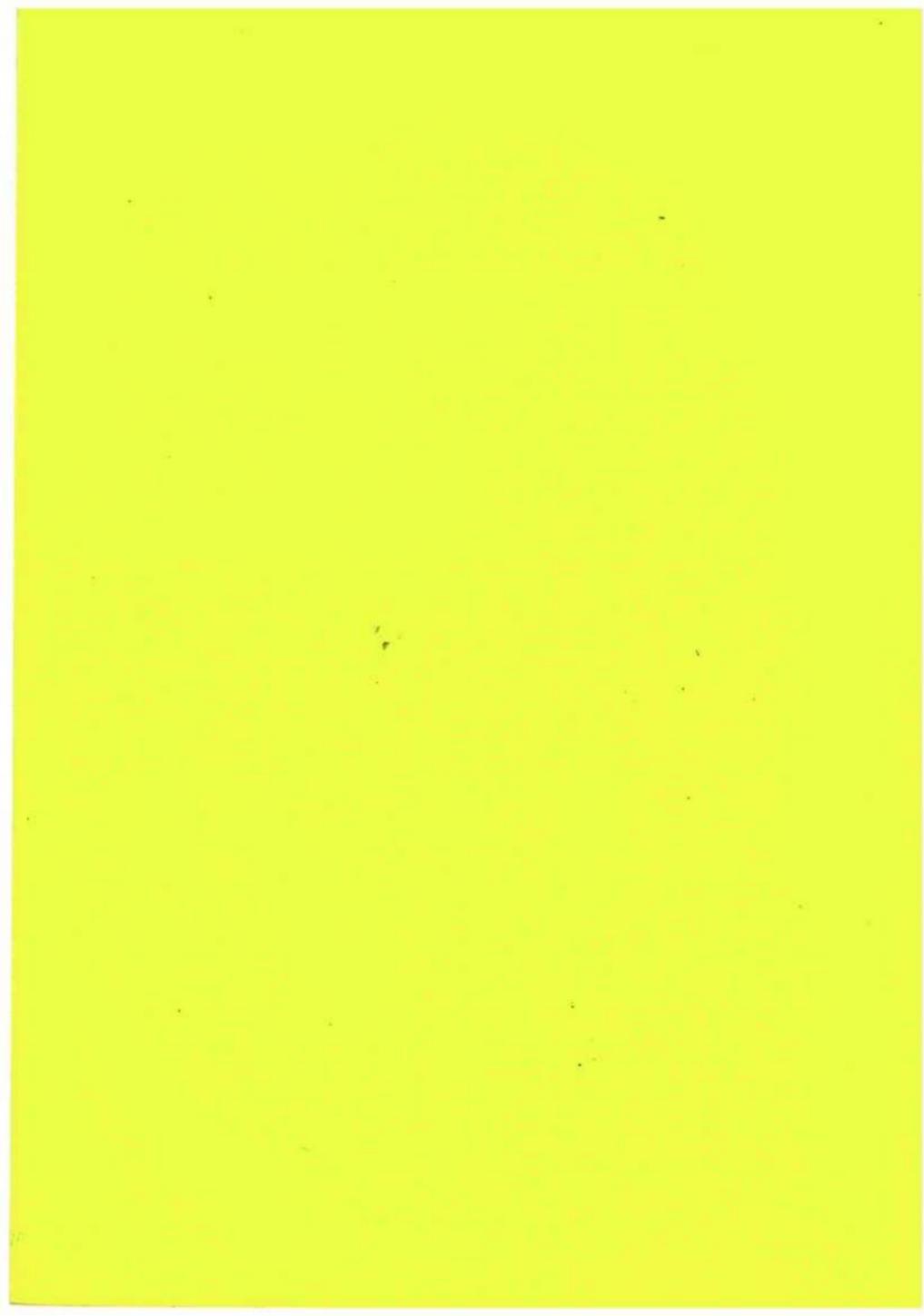
いま

だいら



2004年3月

鹿児島県南種子町教育委員会



序 文

南種子町には、横峯遺跡や広田遺跡等著名な遺跡があります。横峯遺跡は日本最古の礎群として関係者の注目を集め、広田遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての埋葬址として全国に知られています。このように、南種子町は埋蔵文化財の宝庫とも言えるでしょう。

この度、鹿児島県農政部の県営畑地帯農道網整備事業に伴い、平成7年と平成9年に事業区域内（南種子町西之地区）の遺跡分布調査を実施した結果、今平遺跡・龍庵坂遺跡の存在が判明し、縄文時代早期の包含層が発見されました。平成13年6月から2ヶ月間の調査を実施し、平成15年3月までの整理期間をへて、ここにその報告書を刊行することになりました。

刊行にあたりましては地域住民の理解と協力はもとより関係各位のご指導、特に鹿児島県教育府文化財課および鹿児島県立埋蔵文化財センターの方々のご指導を頂きましたことに深く感謝の意を表します。

最後に、本書が多くの方に愛読され、地域の発展に寄与できたら幸いに存じます。

平成16年3月

南種子町教育委員会
教育長 竹迫種俊

報告書抄録

ふりがな	りゅうあんざかいせき・いまだいらいせき						
書名	龍庵坂遺跡・今平遺跡						
副書名	県営畑地帯農道網整備事業西之地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	10						
編集者名	徳田有希乃・石堂和博						
編集機関	南種子町教育委員会						
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1 電 0997-26-1111						
発行年月日	2004年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
りゅうあんざかいせき 龍庵坂遺跡	鹿児島県熊毛郡南種子町西之龍庵坂	5020	81-44	30° 21' 6"	130° 52' 55"	2001.7.3 ~ 2001.7.30	70 m ²	県営畑地帯農道網整備事業西之地区
いはら 今平遺跡	鹿児島県熊毛郡南種子町西之今平	5020	81-41	30° 22' 33"	130° 53' 27"	2001.7.27 ~ 2001.8.29	320 m ²	県営畑地帯農道網整備事業西之地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
龍庵坂遺跡	包含層	縄文時代(早期)		加栄山式土器、吉田式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、平裕式土器、磨製石器、石皿、剝片、磨石、敲石				
今平遺跡	包含層	縄文時代(早期)	土坑3基 チップ集中部	条痕文土器、石匙、スクレイパー、石核、打製石器、磨製石器、フレーク、チップ、石皿、磨石、敲石		平成9年度に畠地帯統合整備事業(土地改良型)で確認調査を行っている。		



第1図 遺跡位置図

例　　言

1. 本報告書は、南種子町教育委員会が鹿児島県教育庁文化財課と鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した、県営畑地帯農道網整備事業西之地区に伴う龍庵坂遺跡・今平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、龍庵坂遺跡が確認調査を平成9年度、緊急発掘調査を平成13年度に実施し、今平遺跡が確認調査を平成7年度、緊急発掘調査を平成13年度に実施した。報告書作成作業は、平成15年度に実施した。
3. 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 挿図の縮尺は各図ごとに示してある。
5. 遺物番号は、本文及び挿図・図版番号と一致する。
6. 本報告書の執筆・編集は徳田・石堂が行った。
7. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は坂口、肱岡・中村（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。整理作業の実測とトレースは徳田・石堂で行った。また、遺物写真撮影は、県立埋蔵文化財文化財センター横手浩二郎氏・西園勝彦氏の協力を得た。

目 次

序文	
報告書抄録	
遺跡位置図	
例言	
第I章 調査の経過	8
第1節 調査に至るまでの経過	8
第2節 調査の組織	8
第3節 確認調査	9
第4節 全面調査	9
第5節 報告書作成事業	11
第II章 遺跡の位置と環境	12
第1節 自然環境	12
第2節 歴史的環境	12
第3節 周辺遺跡	18
1 橋久保遺跡	18
2 塩浦田遺跡	21
第III章 龍庵坂遺跡 調査の概要	22
第1節 龍庵坂遺跡 調査の概要・方法	22
第2節 龍庵坂遺跡の層位	23
第3節 龍庵坂遺跡の遺物	28
1. 土器	28
2. 石器	31
第4節 小結	36
1. 土器について	36
2. 石器について	36
第IV章 今平遺跡 調査の概要	37
第1節 今平遺跡 調査の概要・方法	37
1. 確認調査	37
2. 平成9年度 確認調査	38
3. 緊急発掘調査	42
第2節 今平遺跡の層位	42
第3節 今平遺跡の構造	46
第4節 今平遺跡の遺物	52
1. 土器	52
2. 石器	52

第5節 小結	68
第VI章 まとめ	69

表 目 次

第1表 遺跡地名表(1)	16
第2表 遺跡地名表(2)	17
第3表 塩浦田遺跡表採土器観察表	21
第4表 龍庵坂遺跡 土器観察表	32
第5表 龍庵坂遺跡 石器観察表	35
第6表 今平遺跡平成9年度調査 土器観察表	38
第7表 今平遺跡平成9年度 石器観察表	38
第8表 今平遺跡 土器観察表	61
第9表 今平遺跡 石器観察表(1)	61
第10表 今平遺跡 石器観察表(2)	62
第11表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(1)	62
第12表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(2)	63
第13表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(3)	64
第14表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(4)	65
第15表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(5)	66
第16表 今平遺跡 その他地区出土チップ観察表	67

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 周辺遺跡図	15
第3図 橋久保遺跡基本土層	18
第4図 橋久保遺跡トレンチ配置図	19
第5図 橋久保遺跡1トレンチ疊群	20
第6図 塩浦田遺跡表採土器	21
第7図 龍庵坂遺跡基本土層	23
第8図 龍庵坂遺跡土層断面図	24
第9図 龍庵坂遺跡トレンチ配置図	25
第10図 龍庵坂遺跡グリッド配置図	26
第11図 龍庵坂遺跡遺物出土状況	27
第12図 龍庵坂遺跡出土土器(1)	29
第13図 龍庵坂遺跡出土土器(2)	30
第14図 龍庵坂遺跡出土土器(3)	31
第15図 龍庵坂遺跡出土石器(1)	33
第16図 龍庵坂遺跡出土石器(2)	34
第17図 龍庵坂遺跡出土石器(3)	35

第18図	平成7年度調査出土土器	37
第19図	平成9年度調査トレンチ配置図	39
第20図	平成9年度調査 出土土器・石器(1)	40
第21図	平成9年度調査 出土石器(2)	41
第22図	今平遺跡基本土層	42
第23図	今平遺跡 北壁土層断面(1)	43
第24図	今平遺跡 北壁・東壁土層断面図(2)	44
第25図	今平遺跡グリッド配置図	45
第26図	今平遺跡構構配置図及び遺物出土状況	47,48
第27図	1号土坑	49
第28図	2号土坑	49
第29図	3号土坑	50
第30図	3号土坑出土石器	50
第31図	今平遺跡A2区チップ集中部	51
第32図	今平遺跡出土土器(1)	53
第33図	今平遺跡出土土器(2)	54
第34図	今平遺跡出土石器(1)	55
第35図	今平遺跡出土石器(2)	56
第36図	今平遺跡出土石器(3)	57
第37図	今平遺跡出土石器(4)	58
第38図	今平遺跡出土石器(5)	59
第39図	今平遺跡出土石器(6)	60

図版目次

図版1	龍庵坂遺跡近景・土層断面	73
図版2	龍庵坂遺跡遺物出土状況・出土石鎌・発掘風景	74
図版3	橋久保遺跡近景・疊群	75
図版4	今平遺跡近景・土層断面	76
図版5	今平遺跡遺物出土状況・チップ集中部	77
図版6	今平遺跡1号土坑・2号土坑	78
図版7	今平遺跡3号土坑・出土石匙	79
図版8	今平遺跡チップ集中部出土石鎌・遺物出土状況・発掘風景	80
図版9	龍庵坂遺跡 土器(1)	81
図版10	龍庵坂遺跡 土器(2)・平成9年度今平遺跡 土器	82
図版11	龍庵坂遺跡 石器	83
図版12	今平遺跡土器	84
図版13	今平遺跡 石器(1)	85
図版12	今平遺跡 石器(2)	86
図版13	今平遺跡 石器(3)	87

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課／以下、県農政部）は、鹿児島県熊毛郡南種子町西之地区において県営畑地帯農道網整備事業を計画した。

そこで、県農政部は計画区域内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて、南種子町教育委員会（以下、町教育委員会）と鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県立埋蔵文化財センター）は、平成7年度に分布調査を実施した結果、今平遺跡、龍庵坂遺跡の存在が判明した。

この分布調査結果により、平成7年度に今平遺跡、平成9年度に龍庵坂遺跡の確認調査を町教育委員会が調査主体となり、県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。その結果、縄文時代早期の遺物包含層が確認された。

この確認調査結果を基に、県農政部と県文化財課・町教育委員会との間で、遺跡の保存と事業実施についての協議を行った。その結果、事業計画の変更が困難であるとの判断により、平成13年度に緊急発掘調査を実施し記録保存することになった。

なお、緊急発掘調査は町教育委員会が調査主体となり、県文化財課・県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

第2節 調査の組織

調査主体	南種子町教育委員会		
調査総括	"	教育長	堂之脇大雄(平成7～8年度)
	"	"	高口 稔(平成9～15年度)
調査事務	"	社会教育課長	崎田 宏(平成7年度)
	"	"	平嶋 典男(平成8・9年度)
	"	"(文化係長兼務)	立石 靖夫(平成10～14年度)
	"	体育文化係長	西田 三郎(平成7年度)
	"	"	原 隆昭(平成8～11年度)
"	"	埋蔵文化財係長	坂口 浩一(平成13年度)
"	"	主 事	河野 彰子(平成8・9年度)
"	"	"	中町 美保(平成10～13年度)
確認調査	"	文化財主事	坂口 浩一(平成7～13年度)
緊急発掘調査	"	文化財主事	坂口 浩一(平成7～13年度)
	県立埋蔵文化財センター	"	肱岡 隆夫(平成7年度)
	県立埋蔵文化財センター	"	中村 和美(平成9年度)

発掘作業員

「確認調査」

小西和子、田中真澄、川元敏子、元川シズエ、古田美智子、長田よし子、西田りえ子、浦邊君江、安慶名理恵子、古市悦子、日高ハツミ、寺川順子、坂口和子、峯山鈴子、楠松チワ子、鮫島江美子、古市次男、坂口秀夫、鮫島末一、門谷秀男
「緊急発掘調査」柳田弘、高橋修一、寺川順子、稻川ナナ子、田中真由美、村田秋美、浦邊君江、久保田かおり、向井キミ子、豊島幸子、田頭よし子、園田ハルミ、坂口秀夫、古市悦子、池龟民枝、柳田久美子、古市優子、峯山歩、頓所美佐子、森誠子、小山田鶴子

第3節 確認調査

龍庵坂遺跡の確認調査は、平成9年6月9日から平成9年6月16日まで実働6日間実施した。

調査方法は、区域内に甘藷やサトウキビなどの耕作がされているため、トレントの設定は畑地の端部や荒地を選定した。トレントは、2m×4mを基本とし、4本設定した。表土と攪乱層は重機による剥ぎ取りを行い、包含層は人力により慎重に掘り下げた。

舗場整備された畑の上半分は大きく削平を受けており、また下半分は盛り土が厚く堆積している。1トレントを中心として遺物が出土しているが、急傾斜のため小片が多く、ローリングを受けたものが多く見られる。

今平遺跡の確認調査は、平成7年9月7日から平成7年9月20日にかけて実働9日間実施した。詳細については「南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)」で報告しているので割愛する。

第4節 全面調査

緊急発掘調査は平成13年7月3日～平成13年8月29日（実働28日間）に実施した。

以下、調査の経過については日誌抄にて記載する。

平成13年7月3日(火)

龍庵坂遺跡：基準杭設置。

7月4日(水)～5日(木)

龍庵坂遺跡：プレハブ移動。ベルトコンベア、発電機搬入。センター杭及びグリッドの設定を行う。道路の封鎖ができないため、予定道路の面積半分ずつ調査を行うこととする。重機による表土剥ぎ取り。

7月6日(金)～19日(木)

龍庵坂遺跡：重機による剥ぎ取りを行うが、旧地形はほぼ平坦であるので表土厚が1mをこえる所もあった。A1～4区掘り下げ。アカホヤ直下では遺物がほとんど出土せず、土器の小片が数点出土する程度である。A1区で基部近くに2ヶ所穿孔を施した磨製石錐が出土。土層断面の実測、平板による遺物の取り上げを行う。

7月23日(月)～27日(金)

龍庵坂遺跡：道路を通行止めにし、道路西側部の調査を行う。遺物の出土量は少なく、土器片が10点ほど出土したのみである。A 1～4区掘り下げ。A 3区で石皿と敲石とがセットで出土。土層断面の実測の他遺物は平板による取り上げを行う。立石靖夫社会教育課長来跡。

今平遺跡：センター杭及び控え杭設定。

7月30日(月)

龍庵坂遺跡：重機により埋め戻し。

7月31日(火)

今平遺跡：重機によりアカホヤ層まで剥ぎ取りを行う。午後から掘り下げを行う。出土量は少なく、やや大きめの土器片1点と砂岩礫が数点出土した。

8月1日(水)～8日(火)

今平遺跡：重機により表土剥ぎ取り。A 1～4区掘り下げ。出土量はあまり多くないが、やや大きめの土器片が出土する。A 2区で同一個体と思われる土器片が集中して出土したほか、打製石鎌、磨製石鎌、貞岩及び黒曜石のチップ、石匙等が出土した。また、A 2区、A 3区において土坑を検出。A 5区の表土剥ぎを重機で行う。本村丸田遺跡の地主巣川氏、社会教育指導員徳永春雄氏、石堂和雄氏来跡。また、同志社大学学生の石堂和博氏が3日間発掘実習で参加。

8月9日(木)～24日(金)

A 4～12区掘り下げ。遺物量は少なく土器はほとんど見られない。A 4区で3号土坑を検出し、実測及び写真撮影。コンタ及び土層断面実測。台風が接近。

8月27日(月)・29日(水)

重機により埋め戻しを行う。町水道課広浜係長に来跡してもらい、水道管（P P単管）を修繕してもらう。ベルトコンベア等撤去。

調査終了。

第5節 報告書作成事業

1. 報告書作成事業の経緯

龍庵坂遺跡・今平遺跡の発掘調査報告書作成事業に伴う整理作業については、発掘調査中にも水洗、注記、図面整理等の作業を平行して行っていたが、本格的な整理作業は平成15年度行った。

2. 報告書作成事業の組織

調査主体 南種子町教育委員会

調査総括 " 教育長 高口 稔 [~6月]

" " 竹迫 稔俊 [6月~]

調査事務 " 社会教育課長 上山 幸夫
(文化係長兼務)

" " 主査 松山 りか

担当者 " 主事 德田有希乃

" " 石堂 和博

遺物指導 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 黒川 忠広

整理作業員 西園六代、峰山いづみ、臨田和江、妹尾実広

なお、整理作業においては下記の方々にご教示・ご助言をいただいた。

新東晃一、長野真一、宮田栄二、東和幸、堂込秀人、中原一成、黒川忠広、横手浩二郎、西園勝彦、中村真理、馬籠亮道



第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

南種子町の所在する種子島は、大隅半島最南端の佐多岬から南東約40kmの洋上に位置する。面積447.09m²、延長52km、幅12kmで野間の地峡部では約6kmにしか過ぎない。島の長軸方向は、北北東から南南西に細長く伸びており、九州本土や琉球列島の配列には近い。最高海拔は、282.3mと比較的平坦な地形をしており、九州最高峰の宮之浦岳（標高1,935m）を有する屋久島とは対照的な島である。

地質構造においては島全体に海岸段丘がよく発達しており、東西方向に走る断層によって北部・中部・南部の三区域に分けられる。南種子町は種子島の南部に位置し、東西南の三方向が海に面し北は中種子町を境にする。面積は110.21m²で熊毛諸島の各市町の中では最も狭い。地形は、長谷原尾の212.2mを最高点とし、内陸部は海拔約200m前後の丘陵地帯で平坦な台地を形成する。海岸段丘は、西海岸の島間から門倉岬にかけてよく発達している。高度100mの段丘が一番顕著で、海岸線に沿って南北に延びている。また、この下位に高度60mの段丘面があり、集落を形成するが急傾斜を成して海に迫っている。東海岸は著しく開析を受けた100m以下の台地で、谷系の発達が著しく海岸段丘は殆ど見られない。

南種子町の地質は、基盤を成す熊毛層群（砂岩と頁岩の互層）が広く分布し、西海岸においても熊毛層群が見られる。南種子町の中心地、上中付近から東海岸にかけては、緩やかに傾斜しながら田代層、河内層、大崎層の順に茎永層群が基盤の熊毛層群を覆っている。

南端の門倉岬は、1543年に鉄砲が伝来した岬であり、南東海岸には日本最大の宇宙開発基地種子島宇宙センターが所在する。

龍庵坂遺跡は、鹿児島県熊毛郡南種子町大字西之に所在する。地理的には、南島にのびる台地の尾根に近い場所にあり、標高105m前後の北東斜面に位置する。この台地の東方向には、遠方に弧を描いてのびる前之浜の砂丘が眺望できる。

今平遺跡は、鹿児島県熊毛郡南種子町大字西之に所在する。地理的には、上中市街地から南西方向に直線距離で約4.5km、標高120m前後の東へ緩やかに傾斜する台地上に位置する。遺跡は、北と南の谷系に挟まれており南東へ突き出した舌状台地にある。東側には約65mの標高差をもって田代集落が位置する。ここには鹿鳴川が蛇行しながら東シナ海へと流下している。

第2節 歴史的環境

南西諸島は、大きく三つの文化圏に分けられる。九州本土の文化を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏、南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏、日本文化の影響が殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの南方文化色が強く見られる地域（先島諸島）が南部圏である。

北部圏に属する種子島では、旧石器時代の遺跡はこれまで見つかっておらず、南種子町横峯遺跡

において礫群が発見されたことで旧石器時代研究は始まったといえる。

南種子町の遺跡分布を時代毎に記述する。

旧石器時代

種子島においては、近年まで旧石器時代の遺跡の発見はなかったが、1992年に横峯遺跡で後期旧石器時代の礫群が発見され、種子島にも旧石器時代に人類が存在していたことが判明した。その後、横峯C遺跡（21）の他、中種子町立切遺跡においても横峯C遺跡とはほぼ同時期の礫群・焼土・土坑に伴い、石斧・磨石・敲石・台石などがセットで発見されるなど、旧石器時代の遺跡が確認されてきつつある。しかし、いずれの遺跡においても九州本土で見られるような剝片石器を伴う旧石器文化は発達しておらず、主に砂岩を用いており、磨石・敲石・石皿など植物食料に依存したと思われるものが主体を占めている。細石器文化では、平成12年度に発掘調査した錢龟遺跡（24）があり、船野型マイクロカアとチップなどの接合資料やマイクロブレードなどが出土している。種子島においてこれまでに確認されている細石器文化的遺跡は、西之表市の大中峯遺跡・湊遺跡、中種子町の立切遺跡があるが、現在のところ錢龟遺跡が最南端の発見と思われる。

縄文時代

草創期の遺跡は、隆帶文土器が表採された横峯C遺跡・横峯D遺跡（39）がある。種子島では、西之表市奥ノ仁田遺跡・中種子町三角山遺跡などに類似する土器が出土している他、西之表市の鬼ヶ野遺跡においては隆帶文土器が大量に出土している。

早期の遺跡は、平成10年に発掘調査を行い岩本式土器の出土した上平遺跡（35）、吉田式土器の出土した長谷遺跡（1）、昭和62年に発掘調査を行い塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（14）、平成7年に発掘調査を行い塞ノ神式土器や磨製石器の出土した石ノ峯遺跡（36）、平成14年に苦浜式土器などが表採された枯木野隅遺跡（72）がある。

前期の遺跡では、昭和62年に発掘調査をした平六間伏遺跡（15）、赤石牟田遺跡（2）、繩式土器の出土した上平遺跡（35）などがある。

中期の遺跡はこれまで発見されていない。

後期の遺跡として代表されるのは、平成9年に調査された藤平小田遺跡である。藤平小田遺跡は島間に所在し、海岸線から直線距離にして約400mの台地状に位置する。市来式を中心とした多様な土器の他、石皿・磨石・敲石など大量の遺物が出土した。中でも特筆すべきは配石遺構であり、サークル状に大型の砂岩礫を配している。また、平成7年に発刊された「南種子町の民俗」で紹介された徳丸ヶ野遺跡（49）では、大型の自然石数個を立てた祭壇があり、供養の石塔とされている。周辺の畑には、境界石として並べられた110cm前後の巨大石や石皿・大小様々な石器群があり、細片化した土器片などを確認している。表採される遺物や地形的な観点などから比較して、藤平小田遺跡と酷似する点が多く、今後の調査が期待される。このほか、平成2年に調査を行った一漢式土器だけの単純遺跡である野大野A遺跡（18）や、茶木久保遺跡（23）、田尾遺跡（4）、平成3年に発掘調査を行い市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（11）などがある。

晩期の遺跡は、松原遺跡（11）、一陣長崎鼻貝塚（5）などがあるが、一陣長崎鼻貝塚については今年度新たに資料が追加され、時代検証が求められる。

弥生時代

平山の広田海岸に面する砂丘に立地する埋葬遺跡の広田遺跡（25）が著名である。この特徴として、150体以上にも及ぶ人骨が3時期にわたり、異なった習俗で埋葬されている。また、副葬に南海産の貝を利用した夥しい数の貝製品を使用し、この中の貝符に中国文化との関係を示すものが出土している。しかし、「山」字とされる貝符については研究者の中で異論が多い。その他の遺跡には、本村塚の峯遺跡（8）、本村丸田遺跡（9）、浜田嵐遺跡（6）がある。

歴史時代

昭和60年に発掘調査を行い平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（9）が知られている。出土した遺物には、土師器・須恵器・石斧などがある。

[参考文献]

南種子町教育委員会	「本村丸田遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)	1986
〃	「小牧遺跡・平六間伏遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)	1988
〃	「野大野A遺跡・上瀬田A遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)	1991
〃	「横峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	1993
〃	「松原遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)	1993
〃	「石ノ峯遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	1996
〃	「摺久保遺跡・スカス遺跡・嵐遺跡・今平遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1996
〃	「横峯C遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)	1996
〃	「藤平小田遺跡」	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)	2002
〃	「上平遺跡」	埋蔵文化財発掘調査事業報告書	1999
〃	「錢龟遺跡」	埋蔵文化財発掘調査事業報告書	2000
中種子町教育委員会	「立切遺跡」	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	2002
〃	「立切遺跡」	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	2003
南種子町郷土誌編纂委員会	「南種子町郷土誌」		1987
南種子町教育委員会	「南種子町の民俗」		1995
西之表市教育委員会	「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1995
広田遺跡学術調査研究会	「種子島広田遺跡」		2003
鹿児島県立歴史資料センター 福明編			



第2図 周辺遺跡図

第1表 遺跡地名表（1）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
81-1	高谷	中之上 赤石牟田	台地	绳文（早期）	吉田式	表面調査による出土
81-2	赤石牟田	#	#	绳文（早期・前期）	曾根式・高ノ神式・石鍬・墨壺石片・石匙・石斧・基石	平成4年分布調査
81-3	野大野	西之 野大野	#	绳文（後期）	市来式・磨製石斧・敲石	表面調査による出土
81-4	田尾	鳥間 田尾	#	" (")	市来式・磨製石斧・敲石・敲石・石皿	"
81-5	一郎長崎鼻貝塚	中之下 一郎	低地	绳文（後期）	黒川式・磨製石斧・骨製櫛歯リ・骨鏃・貝殻・人骨・嵌魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
81-6	浜田裏	平山 嶺シ	#	弥生（中期）	土器片（須玖式）	
81-7	広田	平山 島ノ岡	#	弥生（中期・後期）古墳（前期）	弥生土器・人骨13体貝製品・筋鉢車・石鍬・鉄製鉗釘・嵌魚骨・貝類	昭和32～34年発掘調査理界井考古学講演会43号、日本考古学会合併發表（24回総会）、福岡県史誌32巻8号、絆子島民族誌7号広田の民謡。
81-8	本村塚の峠	西之 塚の峠	山地	弥生（後期）	土器片	
81-9	本村丸田	西之 丸田	#	绳文（後期）弥生（後期）平安	指宿式・市来式・曾根式石斧・磨石・石鍬・土器・土師器・須恵器・陶器	昭和60年発掘調査
81-10	本村芋邸	西之 芋邸	#	弥生（後期）	土器片	
81-11	松原	墨水 堀ノ小田	低地	绳文（後期・晚期）古代	集石・市来式・丸尻式・船宿式・石斧・磨石・石鍬・土器・須恵器・青磁	平成4年発掘調査
81-12	上里城址	墨水 野久尾山	山地	中世		中世城跡（昭和34年文化調査）
81-13	上妻城址	島間 内城	#	#		" (")
81-14	小牧	中之上 小牧	台地	绳文（早期）	高ノ神式・磨石・敲石	昭和62年発掘調査
81-15	平六間谷	中之上 平六間谷	#	绳文・古墳	土器片・石斧	"
81-16	上原田 A	西之 上原田	#	绳文	土器片	平成2年確認調査
81-17	上原田 B	#	#	#		昭和53年分布調査
81-18	野大野 A	西之 野大野	#	绳文（後期）	一端式・敲石・磨石・石皿	平成2年発掘調査
81-19	前峠 A	島間 前峠	#	绳文	土器片	平成3年分布調査
81-20	前峠 B	#	#	绳文（早期）	土器片・磨製石斧	平成4年確認調査
81-21	前峠 C	#	#	旧石器绳文（草創期・早中期）	磨石・櫛器・弦管器・集石・石鍬・石斧・敲石・高ノ神式・須恵式・高式	平成4・8～10年発掘調査
81-22	下鹿野	鳥間 下鹿野	#	绳文・古代・中世	石器・土器片	平成13年分布調査（冒頭の道路拡大）
81-23	茶木久保	鳥間 茶木久保	#	绳文（後期）	土器片・石鍬	平成6年確認調査
81-24	錢龜	西之 錢龜	#	绳文（早期）	下剣冢式・桑ノ丸式・天道ヶ尾式・削平式・マイクロコア・マイクロブレード・集石・土坑	平成12年発掘調査
81-25	羽取野	西之 羽取野	#	绳文	土器片	平成4年分布調査
81-26	安久保	西之 安久保	#	绳文（早期）	吉田式	"
81-27	西之大宮田	西之 大宮田	低地	中世	染付・土師器	"
81-28	高所 沙入 A	中之下 東高所沙入	#	#	染付・青磁・白磁・土師器	"
81-29	上松原沙入	墨水 上松原沙入	#	#	土器片	"
81-30	松原山	墨水 松原山	#	绳文	台石	"
81-31	友心沙入 A	墨水 友心沙入	#	中世	土師器	"
81-32	友心沙入 B	#	#	#		"
81-33	福ヶ野 A	平山 福ヶ野	台地	绳文	土器片	"
81-34	福ヶ野 B	#	#	绳文（前期・後期）古墳	绳文土器・成川式	"
81-35	上平	平山 上平	#	绳文（早期・前期）中世	岩本式・瓢式・石鍬・石斧青磁	平成10年発掘調査

第2表 遺跡地名表（2）

番号	道跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
81-36	石ノ峯	中之上 石ノ峯	古地	縄文（早期）	磨製石器、磨石、敲石、石皿、石斧／神式・平底式	平成7年発掘調査
81-37	沼久保	中之上 沼久保	#	縄文（早中期）弥生	石ノ峯式・弥生土器片	平成7年確認調査
81-38	藤平小田	島間 藤平小田	#	縄文（後期）中世	市来式・丸尾式・滑溜式・松山式・一渦式・台付皿など・石鏡・石斧・磨石・敲石・四面・石皿・石鏡・石鏡品など・配石造築・塗石・大型土坑・染付・土器器・青磁・樹立柱建物跡	平成10年発掘調査により消滅
81-39	橋峯D	島間 橋峯	#	縄文（草創期）	縄文	平成7年分布調査・平成13年確認調査
81-40	塙浦田	西之 塙浦田	#	古代	土器片	平成13年確認調査
81-41	今 平	西之 下今平	#	縄文（早期）	石ノ峯式・壽式・石鏡石器・チップ	平成13年発掘調査
81-42	新牧	西之 新牧	#	（#）	土器片・石鏡・石皿・石斧	平成9年発掘調査
81-43	橋久保	西之 橋久保	#	旧石器	遺跡	平成13年確認調査
81-44	龍 埋坂	西之 龍埋坂	#	縄文（早期）	前平式・吉田式・石鏡	平成13年発掘調査
81-45	橋峯E	島間 橋峯	#	旧石器・縄文		平成10年分布調査（周知の遺跡の隣接地）
81-46	鶴野	島間 鶴野	#	弥生	土器片	平成10年分布調査
81-47	丸野	中之上 丸野	#	縄文	#	#
81-48	渡	中之上 渡	#	#	#	#
81-49	徳丸ヶ野	西之 徳丸ヶ野	#	縄文（後期）中世	市来式・丸尾式・松山式・磨石・敲石・石鏡	周知の遺跡平成10年分布調査
81-50	高鼻	西之 高鼻	#	古墳	土器片	平成10年分布調査
81-51	有尾	中之上 有尾	#	縄文	#	平成7年分布調査
81-52	高峯	島間 高峯	#	縄文（後期）	#	平成10年確認調査
81-53	西大曲	中之下 西大曲	#	縄文	#	平成7年分布調査
81-54	椿 山A	中之上 椿山A	#	#	#	平成8年分布調査
81-55	椿 山B	#	#	縄文（早中期）	石ノ峯式	#
81-56	堂ノ中野	中之下 堂ノ中野	#	縄文	土器片	平成9年分布調査
81-57	有鹿野	島間 有鹿野	#	縄文（後期）	市来式・磨石・敲石・石斧	平成13年分布調査（周知の遺跡地火）
81-58	椿 山C	中之上 椿山C	#	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土
81-59	広田II	平山 広田II	#	近世	人骨4体・窓水道	平成11年発掘調査
81-60	神山峯	西之 神山峯	台地	縄文	磨石・土器片	平成13年分布調査
81-61	長 煙	西之 長煙	#	#	土器片	#
81-62	高 田	中之下 高田	低地	中世	#	#
81-63	濱ノ田沙入	中之下 濱ノ田沙入	#	古代・中世	#	#
81-64	真所沙入C	中之下 西真所沙入	#	#	#	#
81-65	真所沙入B	#	#	中世	#	#
81-66	日ノ丸	西之 本村	#	古代	#	#
81-67	久保田	中之下 久保田	#	中世・近世	#	#
81-68	坂元田	中之下 坂元田	#	古代・中世	#	#
81-69	楓原	西之 楓原	台地	縄文	#	#
81-70	轟七畠	中之下 轰七畠	#	#	#	#
81-71	庄田田	平山 大町沙入	低地	縄文（後期）	#	平成8年分布調査
81-72	桔木野瀬	中之上 桔木野瀬	台地	縄文（早中期）	苦浜式土器・石匙・磨石	平成14年分布調査

第3節 周辺遺跡

平成13年度の調査では、龍庵坂遺跡、今平遺跡以外に橋久保遺跡、塩浦田遺跡の確認調査を実施した。いずれも工事に支障がないため本調査は行われなかった。

1. 橋久保遺跡

橋久保遺跡は、背後に迫る段丘の基部から西方向へ傾斜する標高約110mの台地上に位置する。ここからは遠方の屋久島が明瞭に眺望できる。農道は、圃場整備された区域の境界を巡り北南方向に計画された。

平成7年度の分布調査で縄文時代早期の遺跡として周知されている。

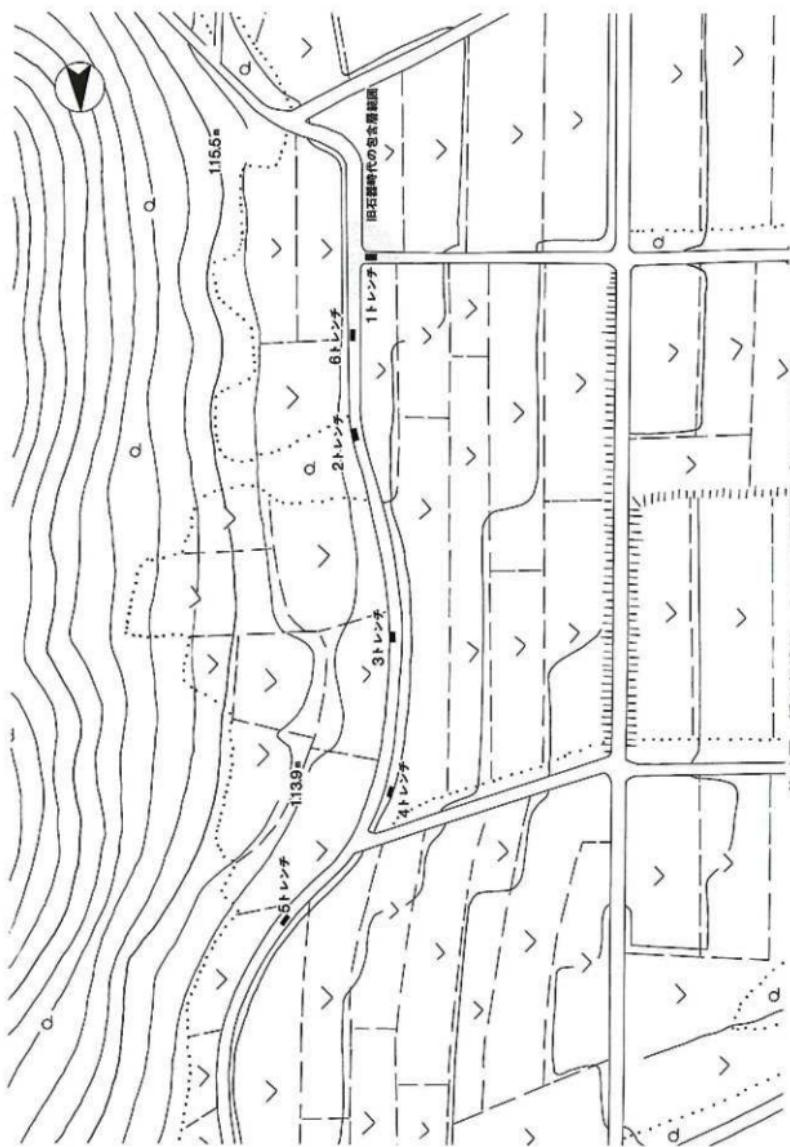
調査は2m×4mを基本としたトレンチを、地形を考慮しながら6本設定した。調査の結果、遺物は確認されなかったが、1トレンチでA.T火山灰下位から礫群が1基検出された。

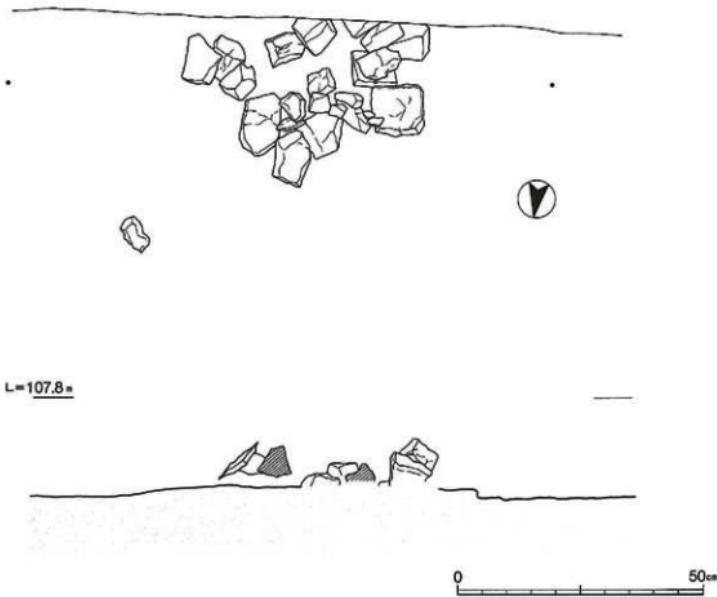
遺跡内の層位は、調査区間内で若干の相違はあるが、基本的には第3図のとおりである。

I層	軟岩砂利	表土
II層	黒色腐食土	
IIIa層	暗黄橙色火山灰	アカホヤ火山灰
IIIb層	暗黄橙色火碎流堆積物	(二次堆積か)
IV層	黄白色軟岩砂利	
V層	明茶褐色粘質土	やや固い
VI層	暗茶褐色粘質土	やや固い
VII層	黄褐色粘質土	固く締まる
VIII層	黄褐色粘質土	上層よりやや柔らかい
IX層	黑褐色粘質土	
X層	黄橙色火山灰	A.T火山灰
XI層	黑褐色粘質土	
XII層	明黄褐色粘質土	火山灰を含むと思われ、やや赤みをおびる
XIII層	黄橙色火山灰	種III(IV)火山灰か

第3図 橋久保遺跡基本土層

第4図 横久保遺跡 トレンチ配置図 (S = 1/1000)





第5図 橋久保遺跡 1トレンチ礫群

礫群は、1トレンチで検出された。1トレンチは橋久保遺跡の中で唯一土層の堆積が良好なトレンチであった。表土を剥ぐとV層が薄く確認された。礫群は、地表面から約170cm掘り下げたXII層で検出された。トレンチの北壁にかかる形で確認され全体を検出することは出来なかったが、平面プランはほぼ円形で直径約50cmを計る。石材はすべて砂岩で、いずれも石化しており数点はひび割れも見られる。礫の大きさは5~10cm程度である。炭化物は見られるものの量はあまり多くない。また、礫群に伴う掘り込みも確認されなかった。1トレンチは若干勾配があり、南西方向にやや下っており、この南西方向に数点赤化した礫が散在する。

礫群が検出されたXII層の下位にあるXI層は、黄色の強い橙色の火山灰層である。この火山灰は種IV火山灰と思われるが、下層確認のために入れたトレンチから種III火山灰が確認できなかったため、種IV火山灰であるのか種III火山灰であるのかは確定できなかった。

2. 塩浦田遺跡

塩浦田遺跡は、東から西方向へ傾斜する標高110m前後の台地上に位置する。橋久保遺跡から直線距離にして約50km北に位置する。

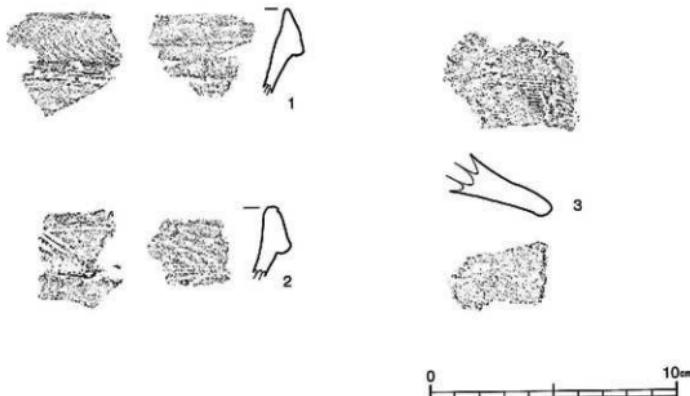
調査は、交通に支障がないように路肩部を選択して設置した。現況道路が狭小であるため1.5m×4mを基本としたトレンチを、地形に考慮しながら4本設定した。

調査の結果、いずれのトレンチでも縄文時代早期相当層は確認されたが、遺構は確認されなかつた。しかし、4トレンチの擾乱層の黒色土から古代のものと思われる土器片が数点出土しており、今回の農道計画路線周辺で遺物包含層の残存する可能性が考えられる。

1～3は、この4トレンチの擾乱層から出土した土器である。1は口縁部を肥厚させて断面は三角形を呈する。口縁部は外反しナデ調整が見られ、内面には輪つぎの跡が明瞭に見られる。2も口縁部で、1同様口縁部の断面は三角形で、口唇部は平坦を呈する。口縁部は内湾し、器形としては胴部に膨らみを持つと思われる。口縁部には貝殻あるいはヘラ状工具で鋸齒状に条痕文を施している。3は底部である。あげ底の脚部を呈し、縦位のヘラ状調整が見られる。1～3は西之表市上能野貝塚を指標とする上能野式土器である。

第3表 塩浦田遺跡 表探土器観察表

補岡 番号	遺物 番号	出土区	層	色 調	胎 土	調 整	文 様	成 成	備 考
6	1	4T	表探	内外面明赤褐色	砂粒を多く含む。 石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	—	良好	口縁部内面に 輪つぎ
6	2	表探		外面にぶい黄褐色 内面橙色	砂粒を多く含む。 石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	口縁部に柔 軟文	良好	口縁部
6	3	表探		内外面にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。 石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	—	良好	底部



第6図 塩浦田遺跡表探土器

第Ⅲ章 龍庵坂遺跡 調査の概要

第1節 龍庵坂遺跡 調査の概要・方法

起因事業である県営畠地帯農道網整備事業は、県営圃場整備事業で区画整理された圃場内を縦横に巡る農道の舗装であり、今回の調査はこの計画に伴う緊急発掘調査である。平成9年度に確認調査、平成13年度に本調査が実施された。確認調査は平成9年6月9日～6月16日まで実働6日間、本調査は平成13年7月3日～7月30日まで実働12日間実施した。

調査面積は確認調査が 27m^2 、本調査が 70m^2 である。

1. 確認調査

この地区は、県営圃場整備事業南種子地区2工区(面積282ha)で昭和50年度から56年度にかけて区画整理されており、遺跡の存在する範囲は昭和50年度に工事実施されている。また、この付近は町道上中・西之線を境に東西へ大きく傾斜しているため遺跡付近は旧地形が著しく変わっている。このことから、トレントの設定にあたってはかろうじて残存する旧地形と耕作者への聞き取りにより行った。

トレントは $2\text{m} \times 4\text{m}$ を基本とし、4本設定した。但し、畠にはサツマイモやサトウキビ等が耕作されているため、耕作者の同意を得て作物の補償を行った。

遺物は1トレントを中心として多数出土したが、急傾斜のため小片が多くややローリングを受けている。

2. 緊急発掘調査

調査は、平成13年7月3日から7月30日まで実働12日間実施した。

調査は、計画路線の中心線を基準に $10\text{m} \times 10\text{m}$ のグリッドを始点(BP)側からA1区・2区・3区・4区と設定した。また、現況道路が約3mと狭小である上に圃場への迂回路もないため、耕作の通行に支障を与えることがないように中心線を基準として調査幅を半減して片側ずつ掘り下げた。

調査方法は、表土と擾乱層を重機で剥ぎ取り、遺物包含層は作業員により慎重に掘り下げた。その結果、A4区中央以降は区画整理に伴い削平されていた。

今回の調査面積は、 70m^2 であった。調査の結果、遺物は少量で遺構も検出されなかった。

調査終了後は、重機により土を埋め戻した後、軟岩砂利を敷設した。

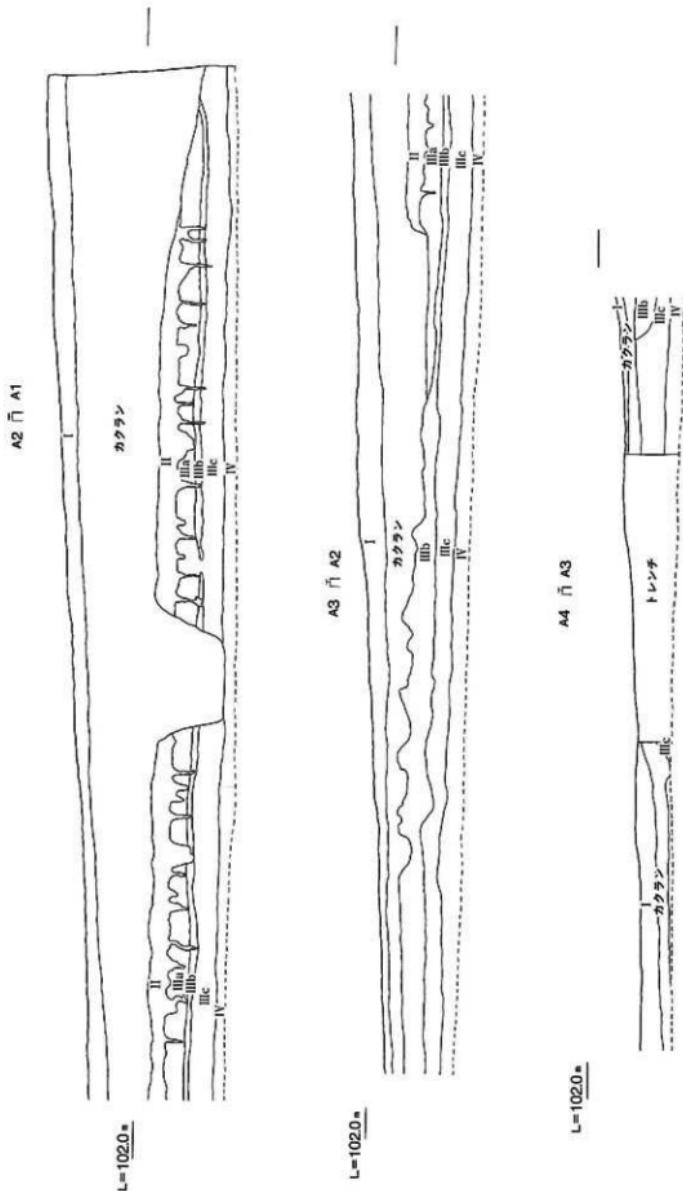
第2節 龍庵坂遺跡の層位

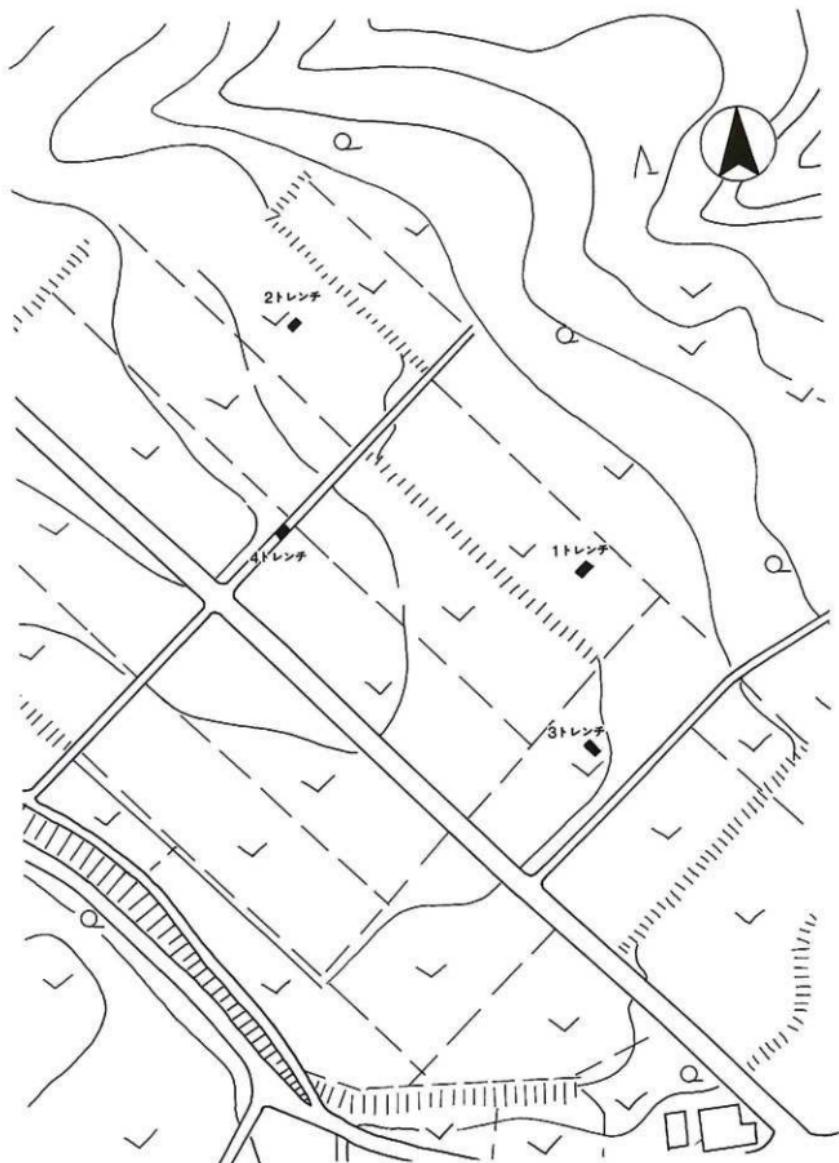
遺跡内の層位は、調査区間内で若干の相違はあるが、基本的には第7図のとおりである。

I層	I層 軟岩砂利	表土
II層	II層 黒色砂質土	
IIIa層	IIIa層 暗黄橙色火山灰	アカホヤ火山灰
IIIb層	IIIb層 明黄橙色火碎流堆積物	橙色バミスを多く含む
IIIc層	IIIc層 明黄橙色火碎流堆積物	橙色バミスを少量含む
IV層	IV層 明茶褐色粘質土	縄文時代早期包含層
V層	V層 暗茶褐色粘質土	

第7図 龍庵坂遺跡基本土層

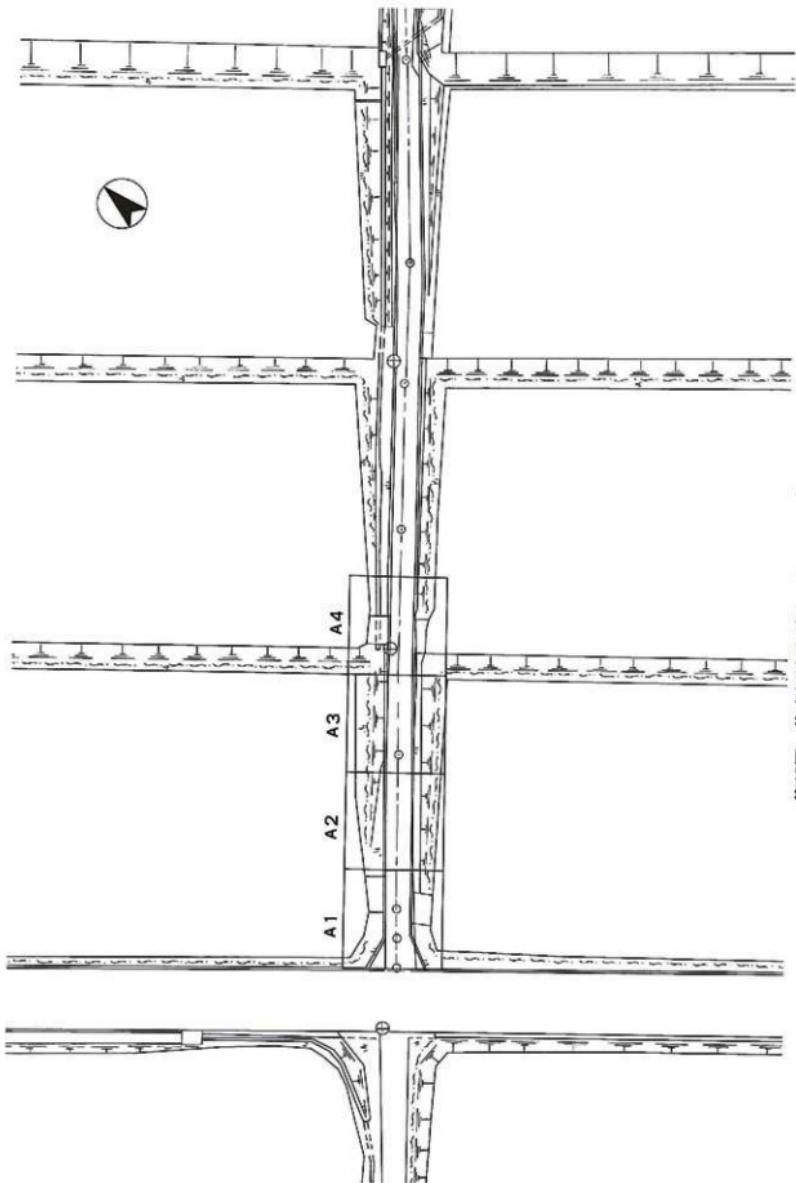
第8図 龍鹿坂遺跡土層断面図 ($S = 1 / 50$)

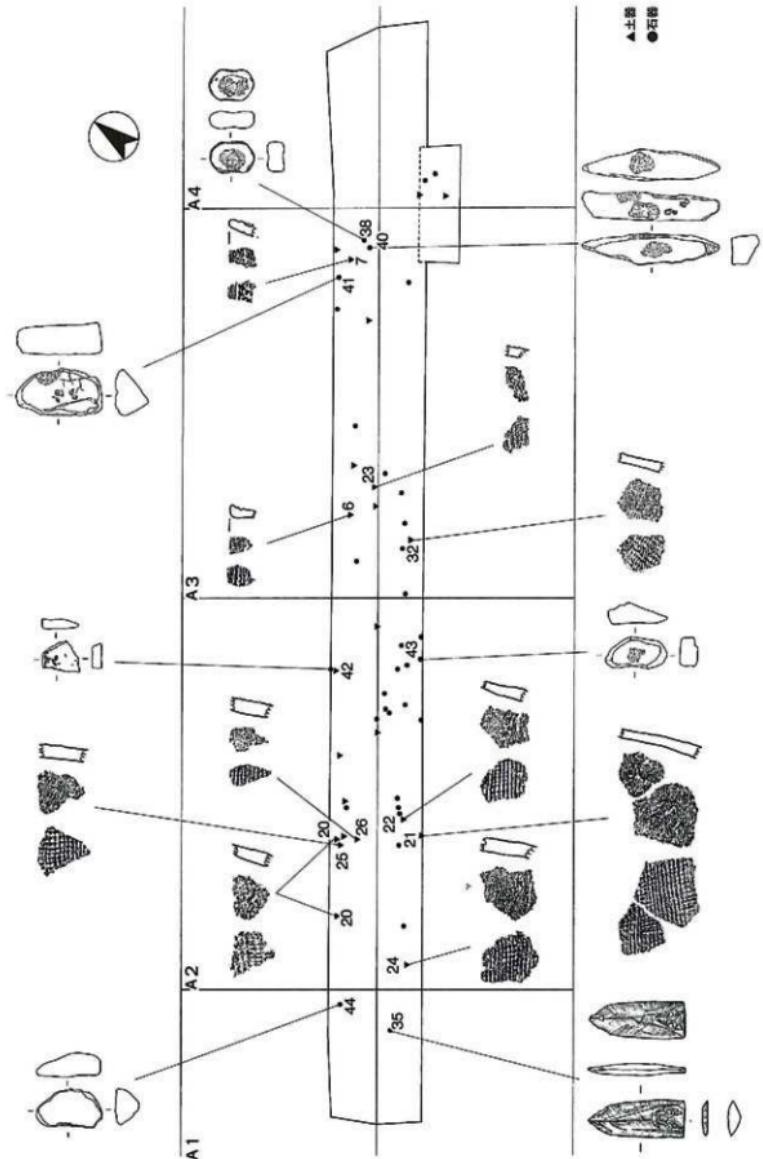




第9図 龍庵坂遺跡トレンチ配置図 ($S = 1/2000$)

第10図 鹿鹿坂遺跡グリッド配置図 ($S = 1/2000$)





第11図 龍施坂遺跡出土状況(クリッドは10m×10m)

第3節 龍庵坂遺跡の遺物

1. 土器

土器は、器形・文様から1～6類と分類した。

1) 1類土器（第12図 1, 2）

胴部に貝殻条痕文や貝殻刺突文を縦位や斜位に施している。

1は表面が風化しているため文様ははっきりしないが、方形に近い貝殻刺突文を施す。2は下部にキザミ目が見られるため、底部に近い部位と思われる。

2) 2類土器（第12・13図 3～25）

口縁部は外反し、口唇部は平坦面を有してキザミ目が施される。胴部は貝殻押引文が全体的に見られる。口縁部付近には貝殻刺突文と沈線が施されている。

3～6は口縁部である。3は鋸齒状の二枚貝の腹線を用いた双交弧文状のキザミが施されている。口縁部はミガキ状に入念な調整がされ、その下に深い横位の沈線が2条施されその沈線文を上下に挟んで深い貝殻刺突文を縦位に施している。この深い貝殻刺突文はくさびの痕跡器官と思われる。内面は入念なナデが見られる。4は、3と同様の施文が施されていると思われるが、小破片のため同一個体なのかは不明である。13も同様に沈線と深い縦位の貝殻刺突文が施されており、口縁部に近い部位と思われる。5、6は、口唇部は平坦で口縁部には横位に貝殻刺突文を施す。5はさらにその下に斜位の貝殻刺突文が施されている。7～25は胴部片である。これらの胴部には貝殻押引文が全面に施されている。

3) 3類土器（第13図 26, 27）

胴部に斜位に貝殻刺突文が施されている。

26は2本1組の貝殻刺突文を鋸齒状に施している。また、調整として器面全体にナデを入念に施している。27は貝殻刺突文を不規則に施しているが、小片のため不明である。

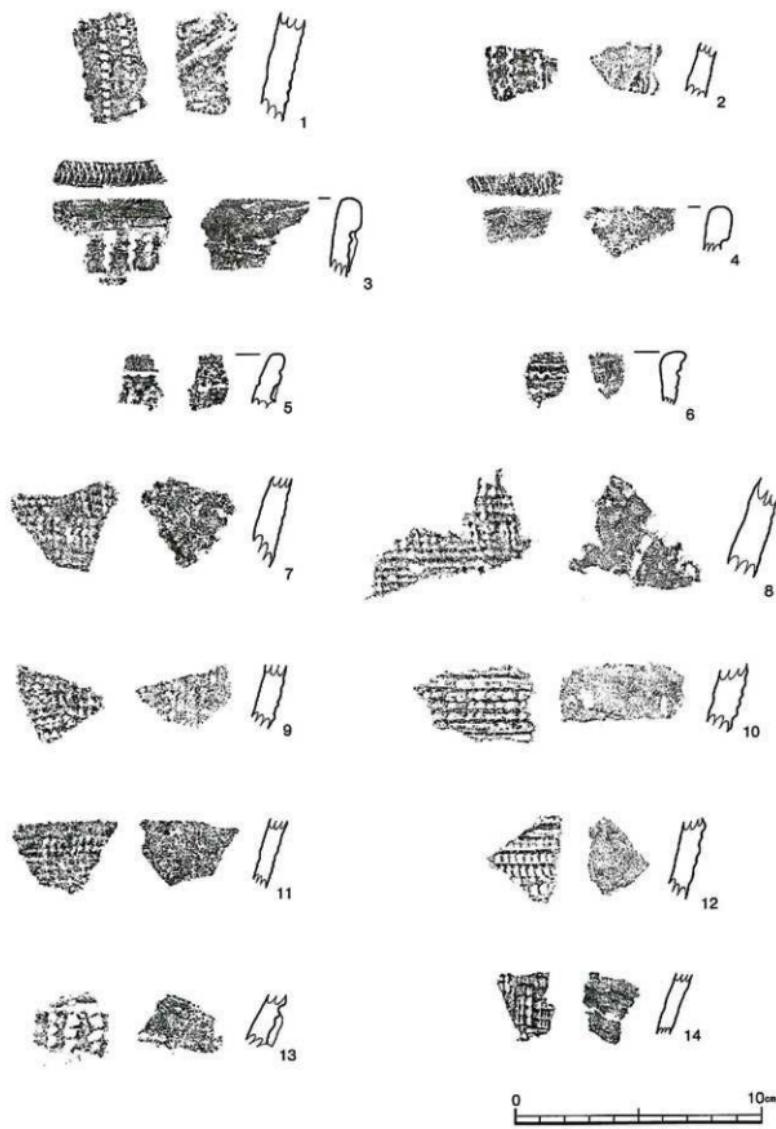
4) 4類土器（第14図 28～30）

器面に丁寧なナデ調整を施している。文様は、貝殻条痕文を鋸齒状に施している。

28～30は文様、胎土、焼成等類似しており同一個体と思われる。いずれも内面調整として丁寧なナデが施されている。

5) 5類土器（第14図 31）

胴部に縄文が施されている。内面調整として入念なナデが施されている。龍庵坂遺跡からは1点のみの出土である。



第12図 龍庵坂遺跡出土土器（1）



15



16



17



18



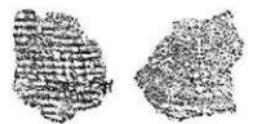
19



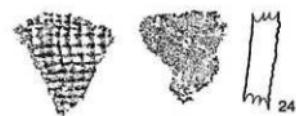
20



22



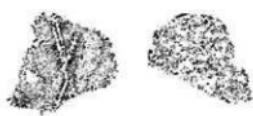
23



24



25



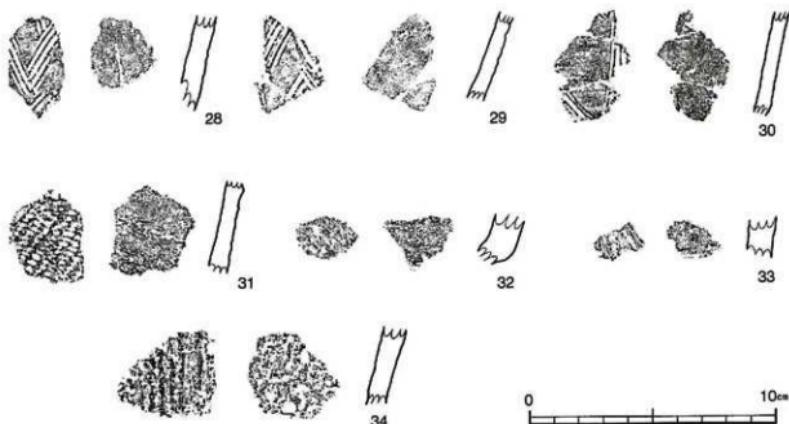
26



27



第13図 龍庵坂遺跡出土土器（2）



第14図 龍庵坂遺跡出土土器（3）

6) 6類土器（第14図 32～34）

いずれも小片のため、どの類に属するのかははっきりしない。

34は縦位に条痕が3本施されているが、風化が著しく文様ははっきりしない。32は底部である。下部にキザミ目が施されているが、小片のためはっきりしない。

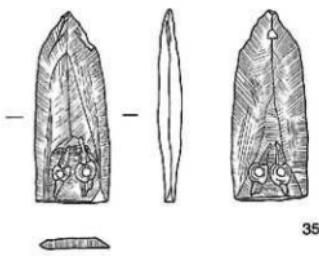
2. 石器（第15～17図 35～49）

35は磨製石鐵である。石材は頁岩で、長さ3.9cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを呈する。先端部分は欠損が見られ、使用によるものと思われる。中央部に稜が見られ、横断面は菱形をなす。基部は平坦に仕上げており、基部の若干上部に2カ所穿孔が施されている。この穿孔は直径4mm程度で、両方向から回転により穿孔し、穿孔中心部は2.5mmほど穿たれる。なお、穿孔したのち、穿孔上位に「ハ」字状に擦り切りによる溝状の削痕を施している。この擦り切りについては機能的な行為と見られるが、現状でははっきりとは言えない。36は砂岩の石皿である。敲き痕が摩滅していないので、磨つたあとに敲いて使用したと思われる。外周を意図的に打ち割った整形痕が見られる。37は石皿の剥片である。二次加工が見られなかったので剥片とした。砂岩である。

磨石・敲石はI～III類に分類した。I類は凹石、II類は敲石、III類は磨り+敲き石とした。38、39はI類凹石である。38は上面・下面のほか側面も全周敲打痕が見られる。40～44はII類敲石である。44は片側面に剥離面が確認される。側面を握って敲打したと思われる。45～49はIII類で、磨り・敲きの両方が見られる。

第4表 龍鹿坂遺跡 土器觀察表

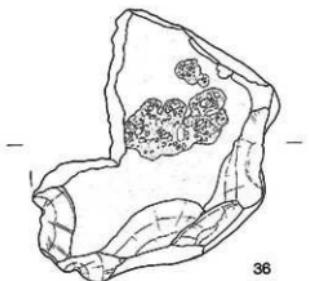
標図番号	遺物番号	出土区	層	分類	色調	胎土	調整	文様	焼成	備考
12	1	1T	IV	1	内外面橙色	砂粒を多く含む。長石、赤色粘土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
12	2	3T	表塗	1	外表面橙色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。石英を含む。	内外面ナデ 外表面ナデキザミ	貝殻剥皮文	良好	
12	3	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、褐色粘土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文 口沿部キザミ	良好	口沿部
12	4	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色	長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ 口沿部キザミ	-	良好	口沿部
12	5	A 3	IV	2	外表面橙色 内面に赤い黄褐色	砂粒を多く含む。長石、石英を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	口沿部
12	6	A 3	IV	2	外表面に赤い黄褐色 内面に赤い褐色	長石、石英を含む。	内外面ナデ 口沿部キザミ	貝殻剥皮文 口沿部キザミ	良好	口沿部
12	7	1T	IV	2	外表面橙色	砂粒を多く含む。長石、石英、赤色土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	8	1T	IV	2	外表面橙色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	9	4T	IV	2	外表面橙色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	10	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色 内面に赤い褐色	長石、石英を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	11	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	12	1T	IV	2	外表面橙色	長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
12	13	1T	IV	2	外表面に赤い褐色	長石、石英、黒雲母、赤色土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
12	14	1T	IV	2	外表面橙色 内面に赤い褐色	長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	15	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色	石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	16	1T	IV	2	外表面橙色	長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	17	1T	IV	2	外表面に赤い黄褐色内面橙色	長石、石英を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	18	A 2	IV	2	外表面橙色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	19	表塗	IV	2	外表面赤い黄褐色 内面橙色	砂粒を多く含む。長石、石英、赤色土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	20	A 2	IV	2	外表面に赤い黄褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	21	A 2	IV	2	外表面に赤い黄褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	22	A 3	IV	2	外表面橙色	砂粒を多く含む。長石、石英、赤色土を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	23	A 2	IV	2	外表面橙色 内面に赤い黄褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	24	A 2	IV	2	外表面橙色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	25	A 2	IV	2	外表面橙色 内面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥引文	良好	
13	26	1T	IV	3	外表面に赤い黄褐色 内面明褐色	粒子細かい。石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
13	27	1T	IV	3	外表面に赤い黄褐色 内面に赤い褐色	粒子細かい。石英を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
14	28	1T	IV	4	外表面に赤い褐色	粒子細かい。石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
14	29	1T	IV	4	外表面明褐色 内面暗灰色	粒子細かい。石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
14	30	1T	IV	4	外表面橙色 内面暗灰色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	
14	31	A 3	IV	5	外表面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、黒雲母を含む。	内外面ナデ	閑文	良好	
14	32	1T	IV	6	外表面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	-	良好	
14	33	1T	IV	6	外表面に赤い褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母、赤色土を含む。	内外面ナデ	キザミ閑文	良好	底部
14	34	3T	IV	6	外表面明褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻剥皮文	良好	



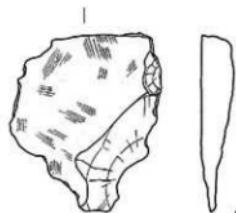
35



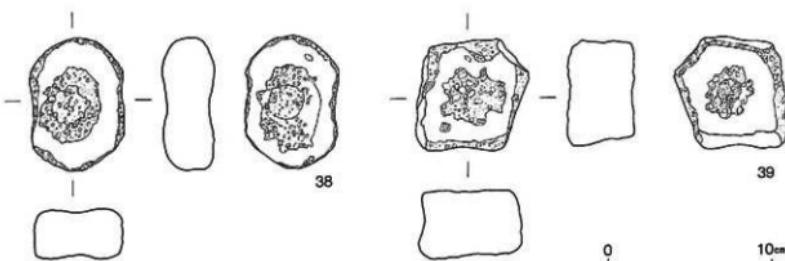
0 5cm



36



37

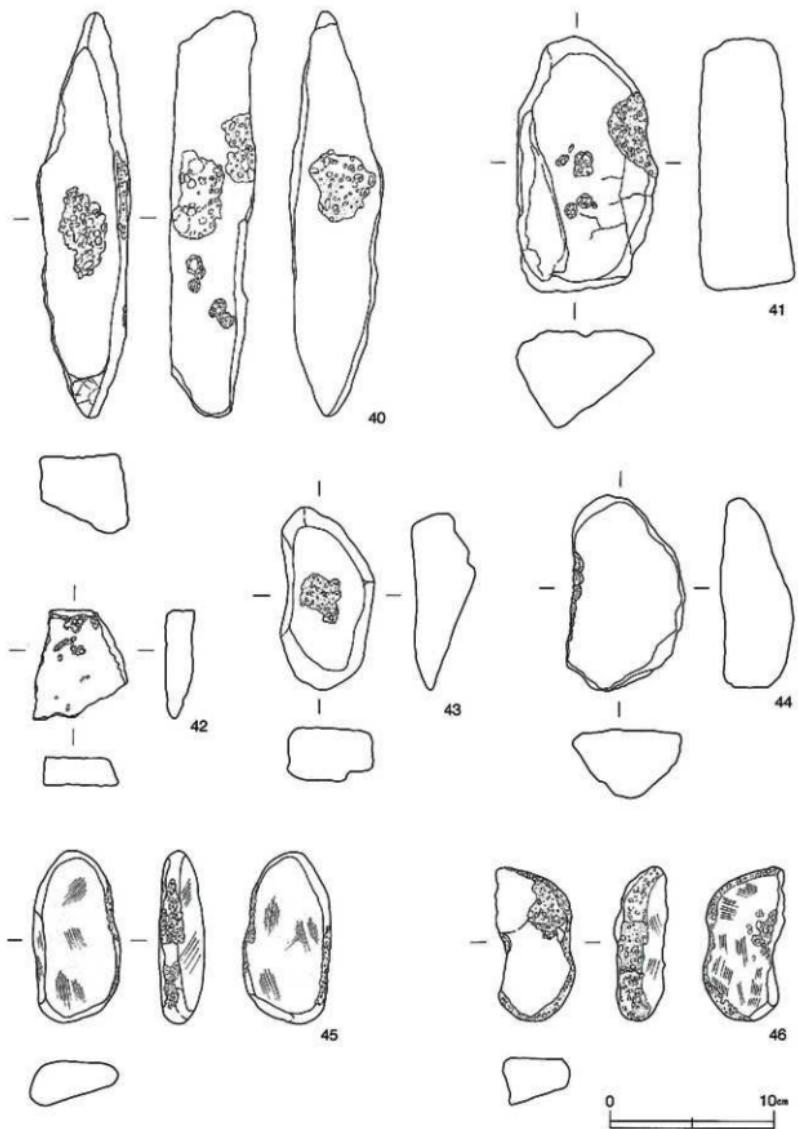


38

39

0 10cm

第15図 龍庵坂遺跡出土石器（1）



第16図 龍庵坂遺跡出土石器（2）



第17図 龍庵坂遺跡出土石器（3）

第5表 龍庵坂遺跡 石器観察表

掲図番号	遺物番号	器種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材	備考
15	35	磨製石鎌	A1	IV	3.9	1.6	0.5	0.003	頁岩	
15	36	石皿	1T	IV	16.7	(15.0)	(10.0)	(1.52)	砂岩	
15	37	剥片	4T	IV	10.8	9.2	3.0	0.215	砂岩	
15	38	I類	A3	IV	8.1	5.7	3.1	0.23	砂岩	
15	39	I類	1T	IV	6.8	6.9	4.3	0.29	砂岩	
16	40	II類	A3	IV	24.8	5.7	5.2	0.732	砂岩	
16	41	II類	A3	IV	15.6	8.55	6.1	0.743	砂岩	
16	42	II類	A2	IV	(6.75)	(5.75)	(1.7)	(0.089)	砂岩	
16	43	II類	A2	IV	11.15	5.8	4.0	0.294	砂岩	
16	44	II類	A1	IV	11.95	7.15	4.4	0.319	砂岩	
16	45	III類	1T	IV	10.5	5.4	2.8	0.188	砂岩	
16	46	III類	1T	IV	9.4	(4.9)	3.2	(0.161)	砂岩	
17	47	III類	1T	IV	7.7	6.6	3.8	0.312	砂岩	
17	48	III類	1T	IV	(6.0)	(5.5)	(3.6)	(0.151)	砂岩	
17	49	III類	1T	IV	(9.7)	6.9	5.1	(0.42)	砂岩	

第4節 小 結

1. 土器について

龍庵坂遺跡で出土した土器は、全体的に微量であった。

1類土器は貝殻条痕文や貝殻刺突文を施しており、加栗山式土器に該当する。2類土器は口唇部に平坦面を有してキザミ目が施され、胴部には貝殻押引文が全体的に見られる。既存の土器型式の吉田式土器に該当する。3類土器は斜位に貝殻刺突文が施され、下剥峯式土器に該当する。4類土器は貝殻条痕文を鋸歯状に施しており、桑ノ丸式土器に該当する。5類土器は縄文が施されており、既存の土器型式の平裕式土器に該当する。

土器の構成として、貝殻押引文を施した吉田式土器が大半を占めるが、加栗山式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、平裕式土器など多様な型式の土器が出土している。

吉田式土器の口唇部に見られるキザミ目は一文字に施すものが多いが、龍庵坂遺跡の吉田式土器の口唇部は鋸歯状を呈している。このような口縁部を呈する吉田式は島内では西之表市の日守遺跡、中種子町の立切遺跡で確認されている。県本土においては東市来町の池ノ頭遺跡で確認されている。池ノ頭遺跡においては吉田式・石坂式にかけて複数の土器型式でこのような施文パターンが見られる。こうしたことより、鋸歯状の口唇部を有する土器にはある一定の広がりが見られ、今後の類例の増加をまちたい。

龍庵坂遺跡出土の土器は大半が確認調査時に出土したものであり、本調査で出土した土器は吉田式土器、平裕式土器のみである。確認調査で出土した土器はほとんどが1トレンチから出土しているが、この1トレンチは遺跡の範囲確認に入れたトレンチであったため事業予定区域にはかかっていなかった。のことから、龍庵坂遺跡の中心部は今回本調査を行った地点より東側に広がるのではないかと思われる。

2. 石器について

龍庵坂遺跡からは穿孔を2つ施した磨製石鎌が1点出土した。やや縁がかった頁岩を用いて作られているが、やや縁がかった種類の頁岩が種子島にあるのかは現在のところ分からぬ。今回龍庵坂遺跡から出土した磨製石鎌は、長身で基部から胴部まではほとんど幅は変わらず、先端に近い部分でカーブを描いている。従来の磨製石鎌の器形とやや形を異にし、2つの穿孔、丁寧な調整などから、この磨製石鎌は何らかの特別な意図を持って作られた可能性も考えられる。

また、今回出土した石器は、磨製石鎌を除き石器はすべて砂岩を用いている。しかし、石材は軟質の砂岩が多いため、風化が著しく使用痕の判別しにくいものが多い。また、磨石・敲石には円礫・角礫いずれも使用している。

第Ⅳ章 今平遺跡 調査の概要

第1節 今平遺跡 調査の概要・方法

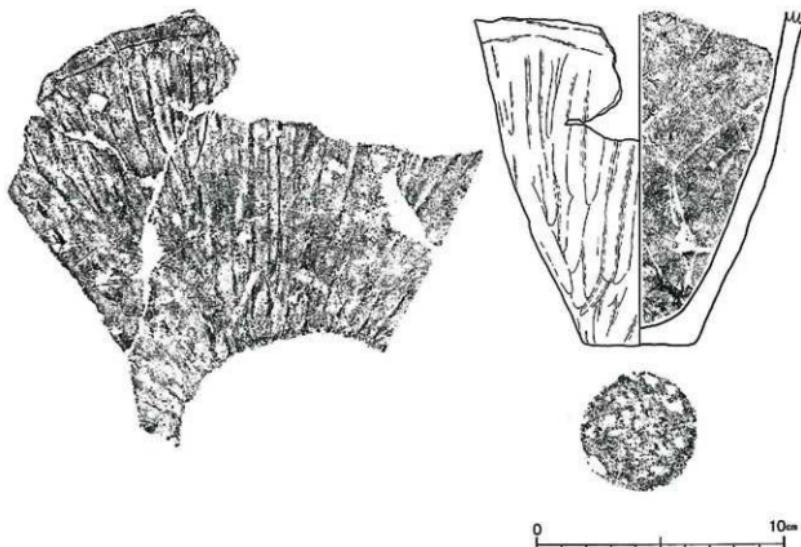
起因事業である県営畑地帯農道網整備事業は、県営圃場整備事業で区画整理された圃場内を縦横に巡る農道の舗装であり、今回の調査はこの計画に伴う緊急発掘調査である。平成7年度に確認調査、平成13年度に本調査が実施された。確認調査は平成7年9月7日～9月20日まで実働9日間、本調査は平成13年7月3日～8月29日まで実働28日間実施した。

調査面積は確認調査が 46m^2 、本調査が 320m^2 である。

1. 確認調査

トレチの設定には、畠地内の作物の植え付けや地権者の同意が得られなかったことから、道路に $1\text{m} \times 3\text{m}$ を基本として10本のトレチを設定し、調査を行った。

調査の結果、2トレチから土器の小片が2点、9トレチから1点土器が出土した。圃場整備事業によりほとんどのトレチでアカホヤ火山灰層まで削平を受けていた。調査の詳細については報告済みであり、割愛する。



第18図 平成7年度調査出土土器

2. 平成9年度 確認調査

起因事業は、畑地帯総合整備事業（土地改良型）で、地力低下した畑の土壤改良を目的とした面積100haの土地改良計画である。この地区は、龍庵坂遺跡と同様、県営圃場整備事業南種子地区2工区によって昭和50年度から53年度にかけて区画整理されており、遺跡の存在する範囲は昭和50年度に工事実施されている。また、この付近は町道上中・西之線を境に東西に大きく傾斜しているため遺跡付近は旧地形が大きく変わっている。このことから、トレンチの設定に当たってはかろうじて残存する旧地形と耕作者への聞き取りによって行った。今平遺跡は平成7年度に確認調査を行っており、今回は遺跡の広がりについての調査を主体とし、2m×4mの大きさを基本としてトレンチを8本設定した。なお、畑にはサツマイモやサトウキビ等が耕作されているため、耕作者の同意を得て作物の補償を行った。調査は平成9年5月26日～6月13日まで実働13日行った。

調査の結果、1, 2, 8トレンチで遺物が出土した。

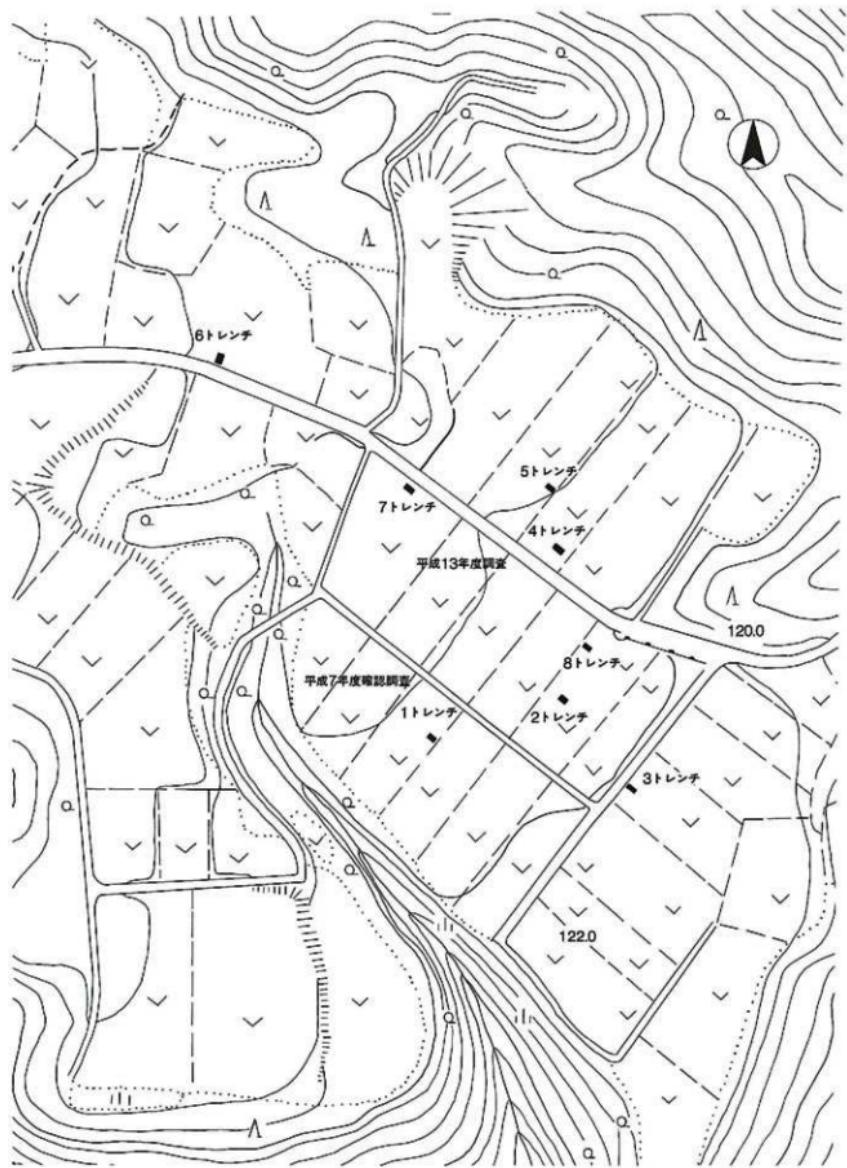
1～3は土器である。貝殻による押引文が施されているため、縄文時代早期の吉田式土器と思われる。いずれも2トレンチからの出土であるが、土層の堆積状況から擾乱の可能性があったためさらに範囲を広げて調査したが明確な資料は得られなかった。4, 5は打製石鎌、6は磨製石鎌である。4は二等辺三角形を呈し、基部に抉りが施されている。姫島産と思われる黒曜石を用いている。5は基部に抉りはなくややふくらみを持つ。先端部が欠損しているため器形ははっきりしないが、長身を呈すると思われる。眞岩製の石鎌である。6は眞岩製の磨製石鎌で、基部にややふくらみを持つ。4, 6は1トレンチ、5は8トレンチから出土した。8は磨り・敲き痕の両方を有している。使用痕を見ると、磨石として使用した後敲石として使用したと思われる。7～9はいずれも砂岩を使用している。

第6表 今平遺跡平成9年度調査 土器観察表

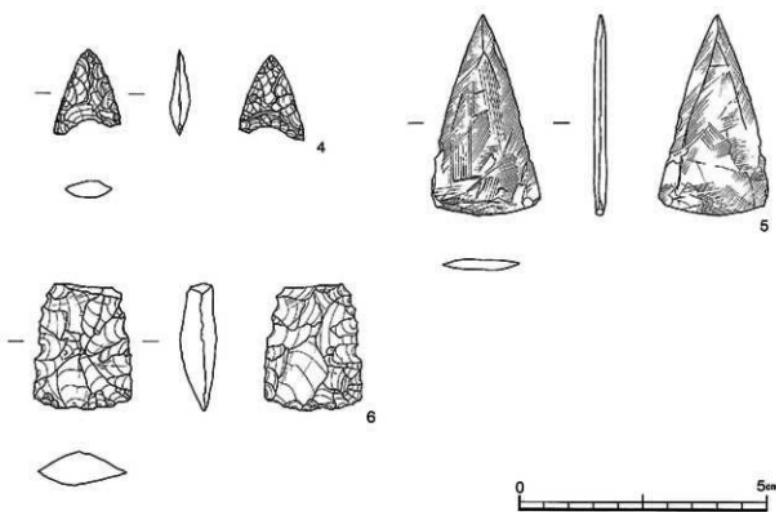
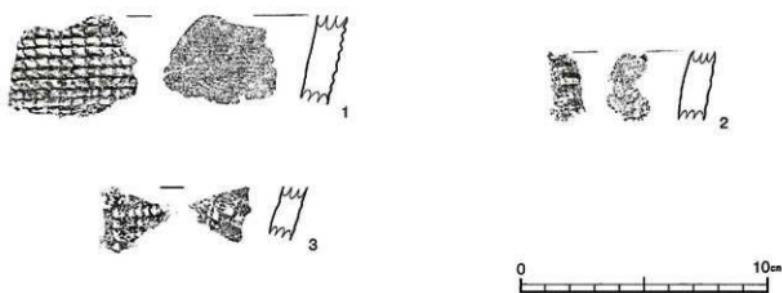
捕獲番号	遺物番号	出土区	層	色 調	胎 土	調 整	文 様	焼 成	備 考
20	1	2T	表採	内外面にびい褐色	粒子細かい、長石、石英、黒雲母、赤色土を含む。	内外面ナデ	貝殻押引文	良好	口縁部
20	2	2T	表採	外面褐色 内面にびい褐色	長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻押引文	良好	
20	3	2T	表採	内外面褐色	砂粒を多く含む。 長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝殻押引文	良好	

第7表 今平遺跡平成9年度調査 石器観察表

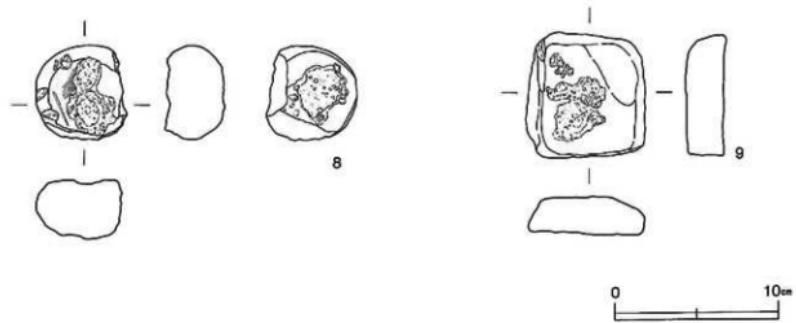
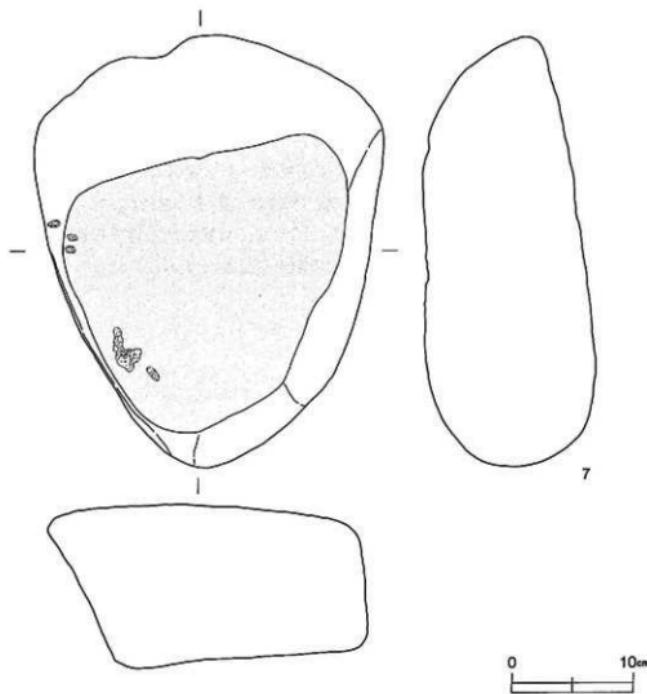
捕獲番号	遺物番号	器 種	出土区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備 考
24	4	打製石鎌	1T	IV	1.85	1.35	0.35	0.6	黒曜石	
24	5	磨製石鎌	2T	IV	4.1	2.2	0.25	2.5	眞岩	
24	6	打製石鎌	8T	IV	(2.5)	2.0	0.75	(3.7)	眞岩	
捕獲番号	遺物番号	器 種	出土区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	石材	備 考
25	7	石皿	1T	IV	35.5	28.7	14.0	18.45	砂岩	
25	8	磨石・敲石	2T	表採	5.85	5.5	3.85	0.148	砂岩	
25	9	敲石	1T	IV	7.7	7.3	2.6	0.23	砂岩	



第19図 平成9年度調査トレーンチ配置図 (S = 1/2000)



第20図 今平遺跡平成9年度調査 出土土器・石器（1）



第21図 今平遺跡平成9年度調査 出土石器（2）

3. 緊急発掘調査

調査は、平成13年7月27日から8月29日まで実働17日間実施した。

路線の幅員が4.0mで砂置き換えによる掘削幅が3.5mで計画されている。そのため、今回の調査は計画路線の中心線を基準に10m×10mのグリッドを西側からA1区、A2区・・・A10区と設定した。

調査にあたっては、表土から包含層の上位までを重機により剥ぎ取り、調査機関の短縮を図った。

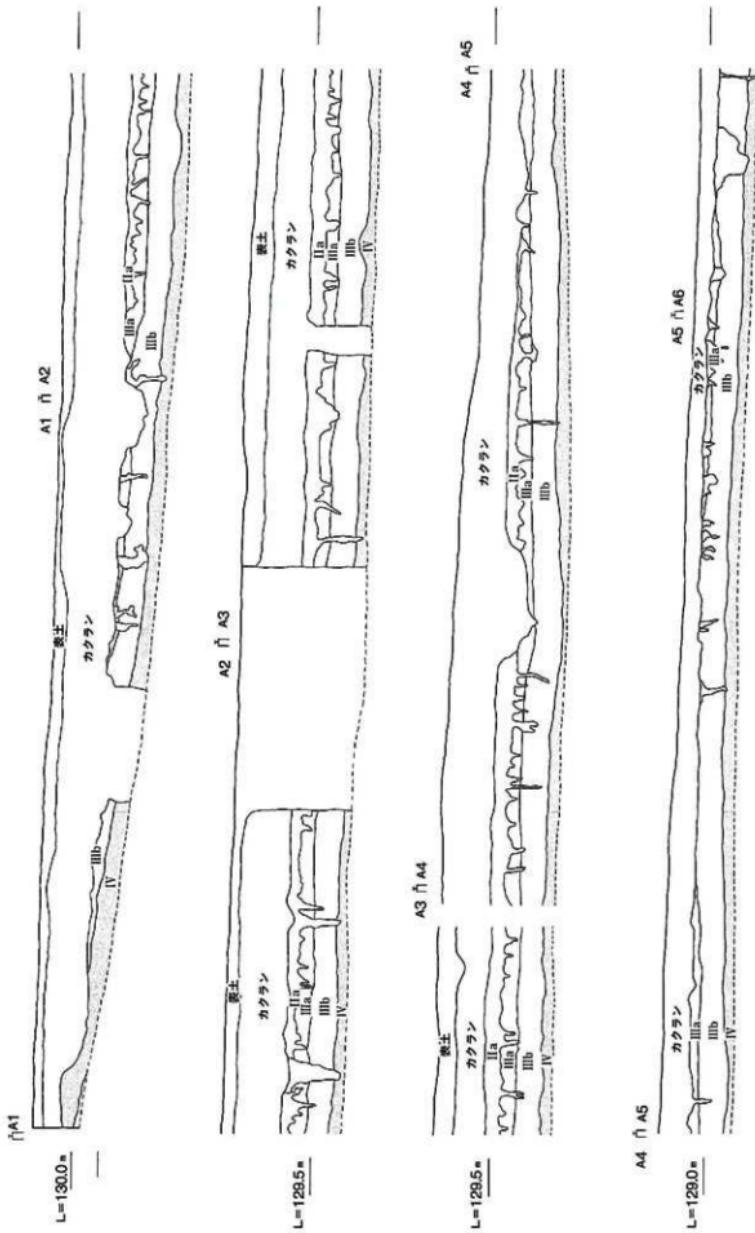
今回の調査面積は320m²であった。調査の結果、土坑が3基検出された。また、A2区東側において頁岩、安山岩、黒曜石のチップが大量に出土しており、石器製作に伴うものと思われる。同様の集中部はA3区においても若干見られる。遺物の出土量は少量であった。

第2節 今平遺跡の層位

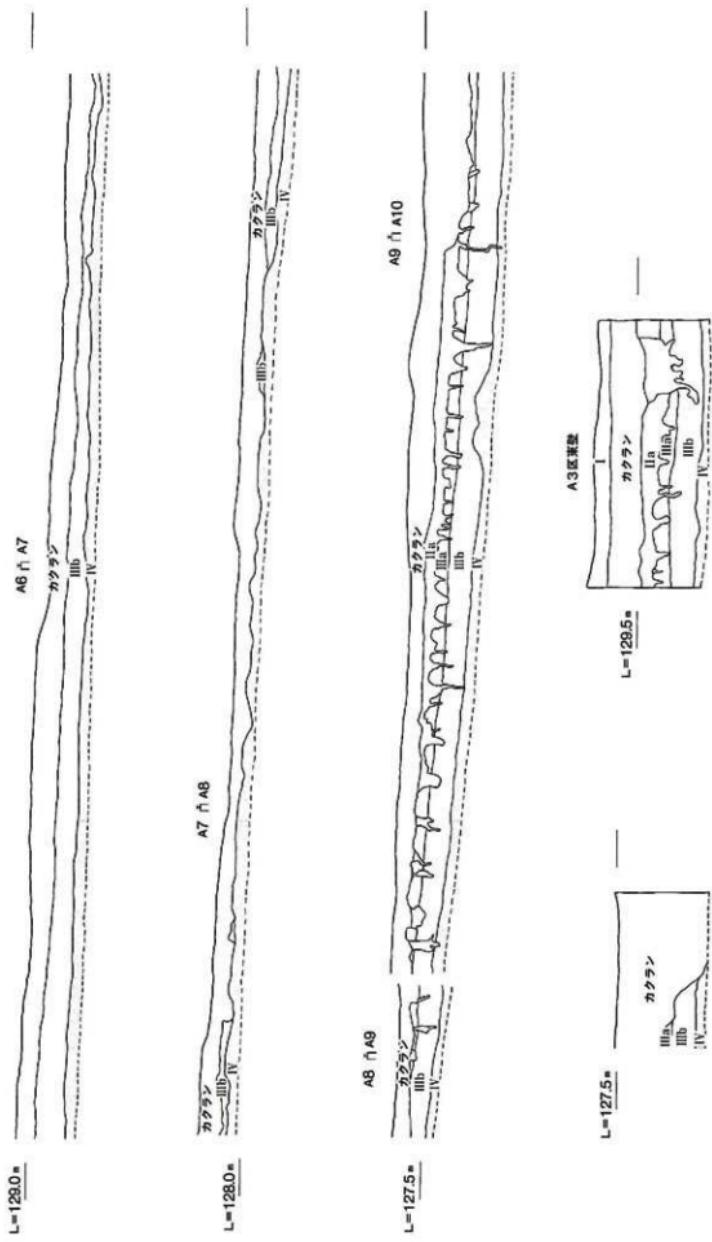
遺跡内の層位は、調査区間内で若干の相違はあるが、基本的には第22図のとおりである。

I層	I層 軟岩砂利層	表土
IIa層	IIa層 黒褐色砂質土	やや軟質
IIb層	IIb層 黒色砂質土	
IIIa層	IIIa層 暗黄橙色火山灰	アカホヤ火山灰
IIIb層	IIIb層 黄橙色火碎流堆積物	橙色バミスを多く含む
IV層	IV層 明茶褐色粘質土	縄文時代早期包含層
V層	V層 暗茶褐色粘質土	

第22図 今平遺跡基本土層

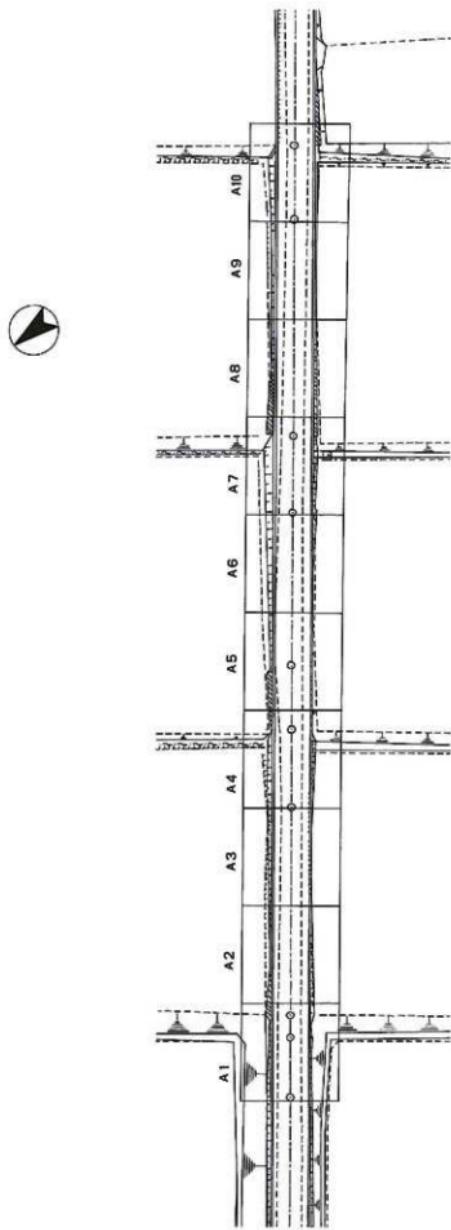


第23図 今平道路 北壁土層断面（1）



第24図 今平遺跡 北壁・東壁土層断面図

第25図 今平道路グリッド配置図 ($S = 1/500$)



第3節 今平遺跡の遺構

今平遺跡から検出された遺構は、土坑が3基である。A 2～4区でそれぞれ1基ずつ検出された。そのうちの1基は赤化し固く締まった埋土が確認されている。

(1) 1号土坑（第27図）

A 2区で検出された。トレンチの南壁にかかっているため全体の形は不明であるが、A-A'の付近でややくびれ、不定形を呈すると思われる。検出されている部分の長径は1.0m、短径最大幅1.24m、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は明茶褐色土1層のみで、5mm程度の黒褐色土、赤褐色土をブロック状に含む。しまりがあり炭化物を少量含む。IV層に比べるとやや暗い。埋土中からは数点焼けた小砾と小土器片が出土した。

(2) 2号土坑（第28図）

A 3区で検出された。トレンチの南壁にかかっているため全体の形は不明であるが、円形を呈すると思われる。検出されている部分においては長径7.7m、深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は1号土坑と同様明茶褐色土で、5mm程度の黒褐色土、赤褐色土を含む。遺物の出土はなかった。

(3) 3号土坑（第29図）

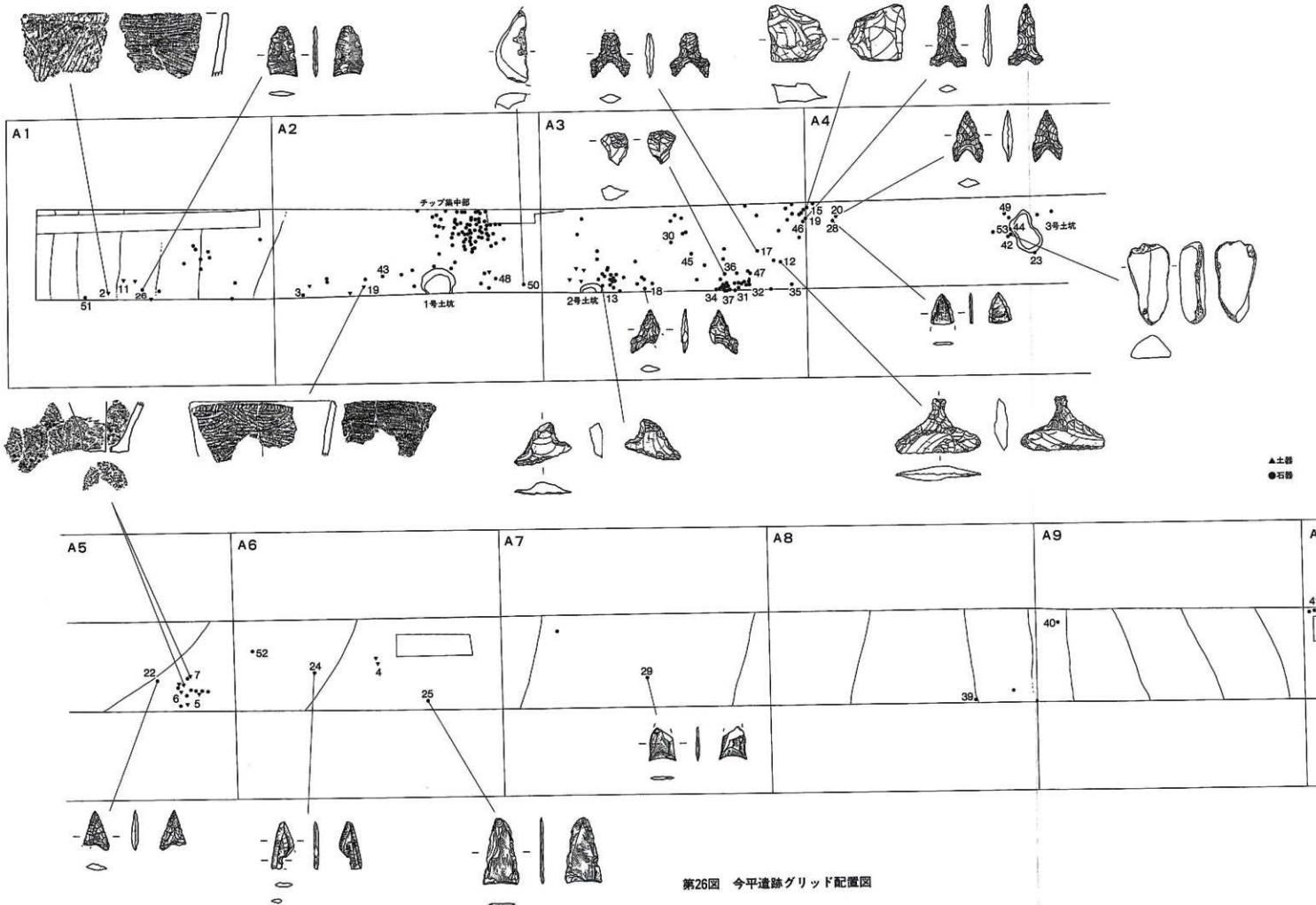
A 4区で検出された。中央部分がやや幅狭な不定形を呈する。長径1.46cm、短径9.5m、深さ15cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は暗黄褐色土に5mm程度の黒褐色粘質土と若干黄橙色土が混じる。固くしまり、まれに赤褐色の粘板岩のようなものが混じる。中央部や南寄りのところで埋土上面から2cmほど赤化が著しく非常に固くしまる部分がある。埋土中から土器の小片のほか、被熱によると思われる赤化や破碎の見られる砂岩・粘板岩礫が確認されており、火を使った可能性が考えられる。しかし、赤化しているのは埋土の上面のみであるため、土坑と直接関わりがあるかは不明である。

土坑からは土器も出土したが、小片であったため文様などの判別は出来なかった。1は敲石である。砂岩を石材とし、整形のためと思われる剝離痕が見られる。

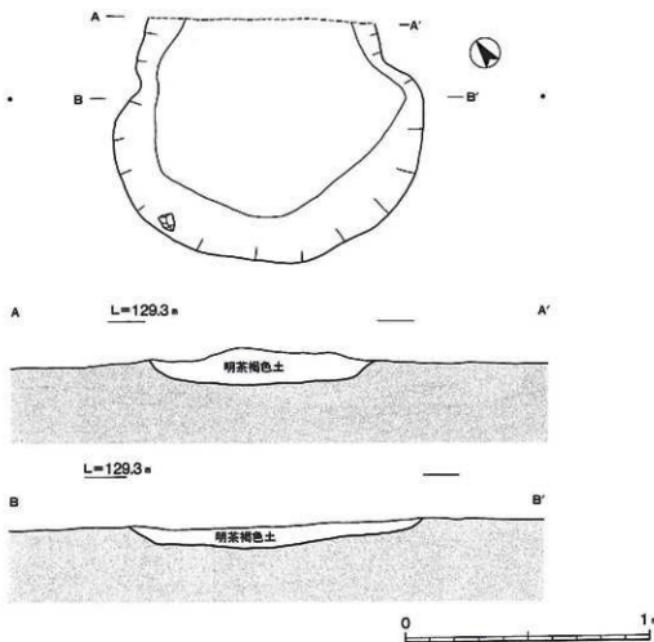
(4) チップ集中部（第31図）

A 2区において、頁岩、黒曜石、安山岩のチップが集中して出土した。チップの中には押圧剝離によって生じたものが混じり、チップの検出面もほとんどばらつきがなく、また周辺からは打製石錐や磨製石錐が出土していることから、こうした石器の制作場所であったと思われる。同様にチップが集中しているポイントがA-3区にも確認され、これらも石器の制作に関わるものである可能性が考えられる。

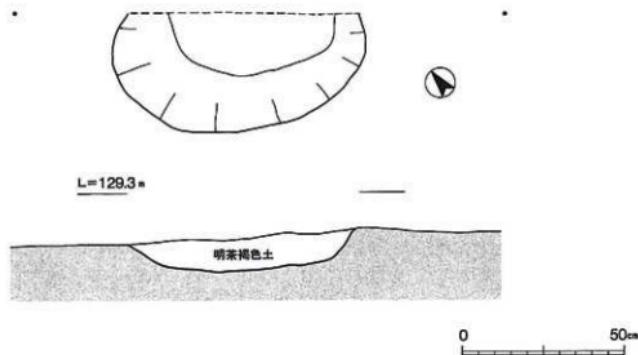
石材で見ると、出土したチップは大半が安山岩や黒曜石であり、それに若干頁岩が混じっている。



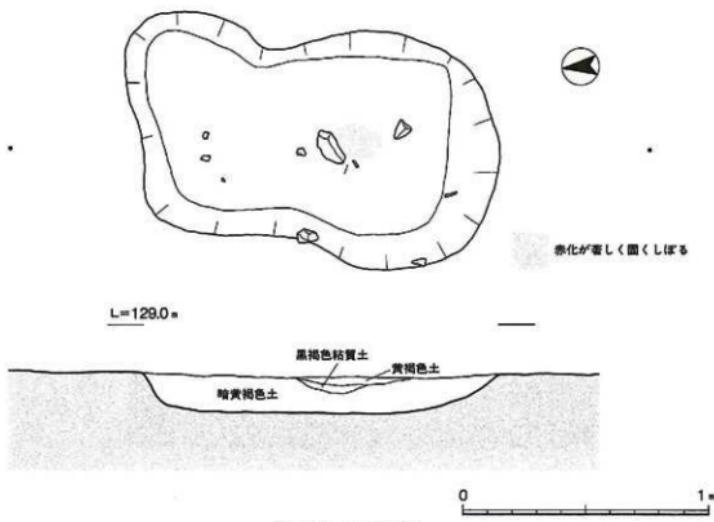
第26図 今平遺跡グリッド配置図



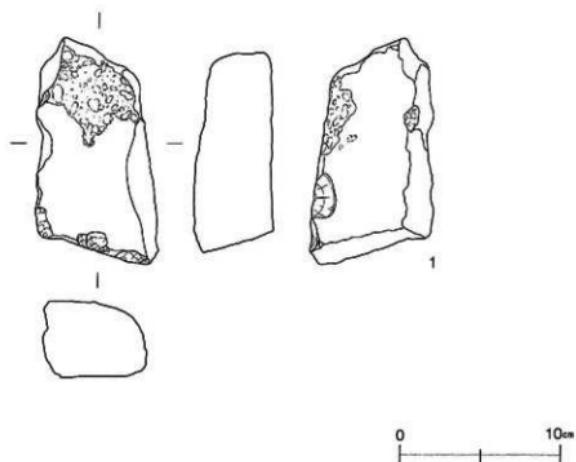
第27図 1号土坑



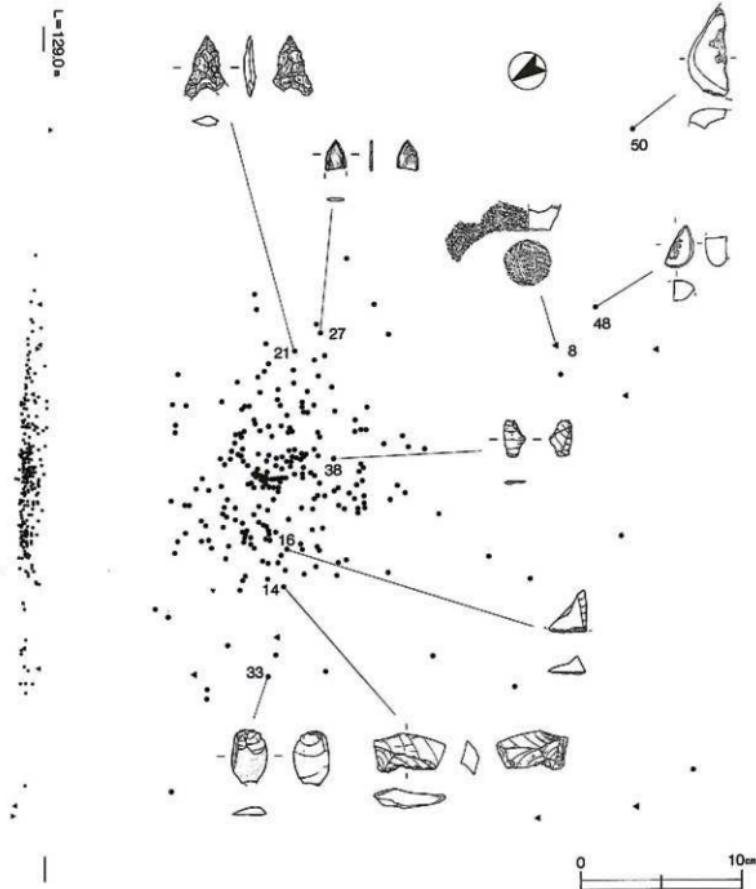
第28図 2号土坑



第29図 3号土坑



第30図 3号土坑出土石器



第31図 A2区チップ集中部

第4節 今平遺跡の遺物

1. 土器（第32～33図 2～12）

土器の出土は微量で、A 1区とA 2区で十数点出土するのみでほかのグリッドでは出土しなかった。

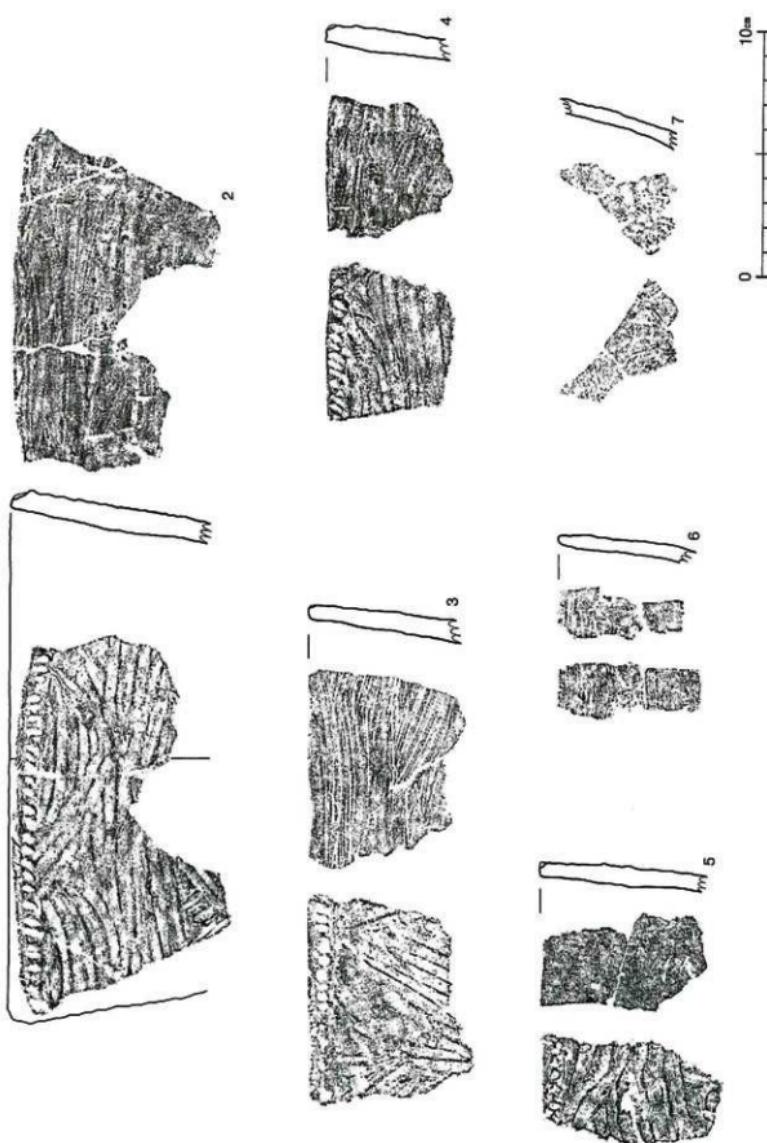
器形はほぼ垂直に立ち上がる。胎土は砂粒小礫を比較的多く含んでいる。器面には不自然な小隆起が不規則に見られる。この不規則な小隆起がこぶ状突起を意識しているのかは不明である。文様は幅広工具による条痕で、やや弧状を呈する施文を口縁部に施し、口唇部はナデ調整により平坦を呈する。これらの施文、調整を施したあと口縁部上端外面に貝殻によるキザミ目を施している。

2～6は口縁部である。2は口縁部にわずかに煤の付着が見られる。内面は貝殻による横方向の調整を施したのち軽いヨコナデを施す。3は幅広工具による縦位、斜位の条痕が2とは異なり口唇部を意識したキザミを施すが、均等ではない。内面調整としては、肋の細かな貝殻による横方向の条痕を施したのちナデ調整を施している。7は大きく湾曲しており、部位としては底部付近のものと思われる。8、9は底部である。8は直径4.6cmを呈し、比較的小型で薄い。底部から胴部にかけて鋸歯状の調整のようなものが見られるが、断定できない。底部中央が薄く6と同一個体の可能性が考えられる。9は直径5.4cmを呈し、比較的厚い。底面及び胴部立ち上がりに削り取るような調整が施されている。底部には粘土を貼り足しているが、残存する部位のみでは粘土を充填したのか貼り付けたのかははっきりしない。底部内面には、粘土紐と思われるものが付着している。底部は、8、9いずれも調整のための条痕が見られる。10～12は胴部である。胴部は貝殻を用いたややシャープな条痕文を施しており、一見石坂式土器に見られる緩杉状の文様を彷彿させるが、石坂式土器に比べれば施文が荒い。施文の順番としては右下がり・左下がりの順で反時計回りに施文していると思われる。

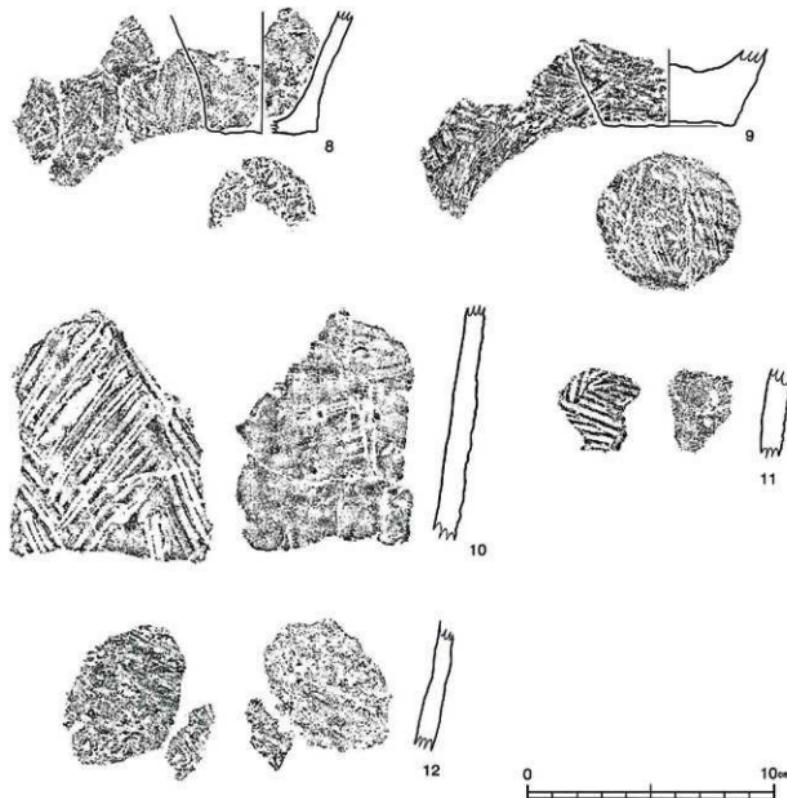
2. 石器（第34～39図 13～54）

13、14は石匙である。いずれも形態的には横型に属し、石材は安山岩である。14は長さ2.7cm、幅1.75cm、厚さ0.6cmと比較的小型な石匙である。15はスクレイバーである。石材は同様に安山岩である。17は両端欠損しているが、側面に調整が見られるためスクレイバーの可能性が考えられる。18～30は石鎌である。打製石鎌が7点、磨製石鎌が6点、摩滅が著しく打製か磨製か判別できない石鎌が2点の計15点出土した。18～24までの7点は打製石鎌である。18～20は基部及び側辺部に抉りを入れ、脚部を強調した作りを意識している。20は長さ3.05cmと長身である。21、22も基部及び側辺部に抉りが見られるが側辺部の抉りはあまり施されてないため、器形としては脚部が若干張り出す程度である。23は基部のみ抉りを施しているため二等辺三角形を呈する。24は若干片脚が短く、未製品の可能性も考えられる。石材はほとんどが安山岩で、21のみ姫島産と思われる黒曜石である。打製石鎌に用いられた安山岩は、西北九州産の安山岩に類似している。25～30の6点は磨製石鎌である。25は二等辺三角形を呈し、基部から体部中央にかけては磨きによって窪んでいる。基部は平坦に仕上げ、基部の若干上位には穿孔が施されている。穿孔は両方向から回転により穿たれており、全体的に丁寧な調整が施されている。石材は緑泥片岩である。26、27は基部が緩やかに内湾し、器

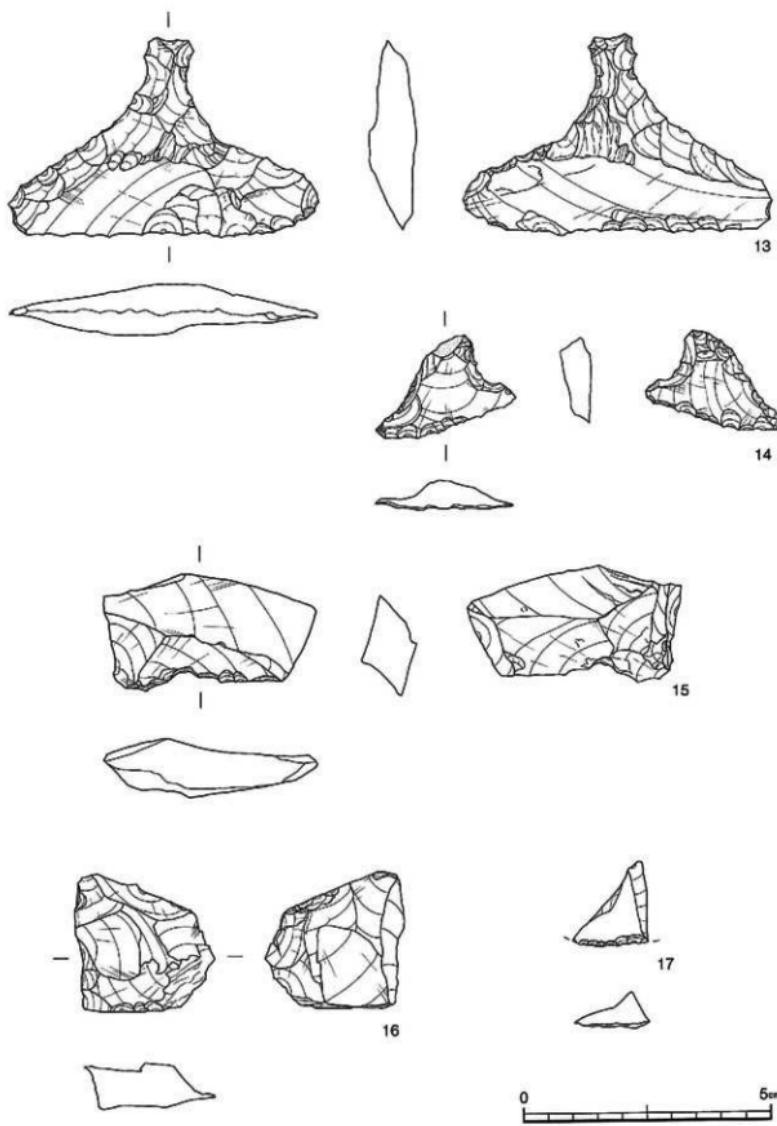
第32圖 今平遺跡出土土器（1）



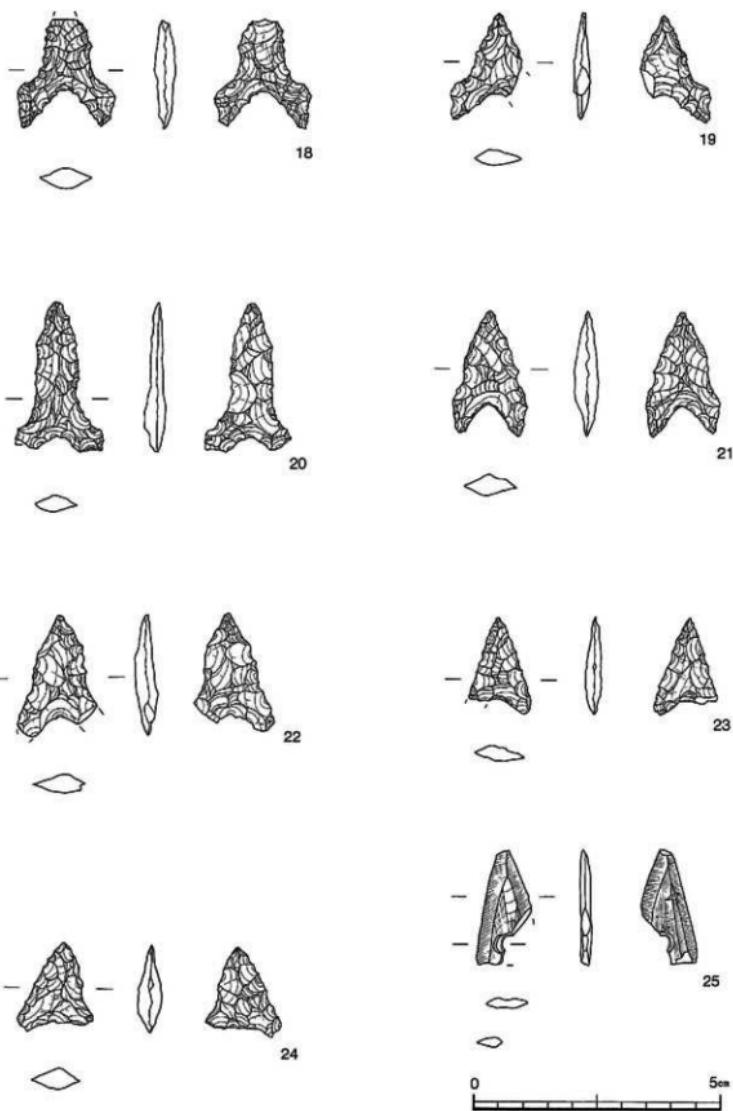
形は長身を呈する。いずれも押圧剥離を施したのち磨いている。27は磨痕が顕著で、工具を用いて稜線がたつように斜め方向に磨きを施している。28, 29は基部が欠損しており器形ははっきりしないが、やや短身の磨製石鎌と思われる。27はやや五角形を呈する。30も同様に基部に緩やかな内湾が見られる。側片部においても基部に近い部分でやや内湾し、脚部が若干張り出した形を呈する。石材は25以外頁岩を用いている。31～39は剝片である。石材は、40が安山岩、それ以外は黒曜石である。



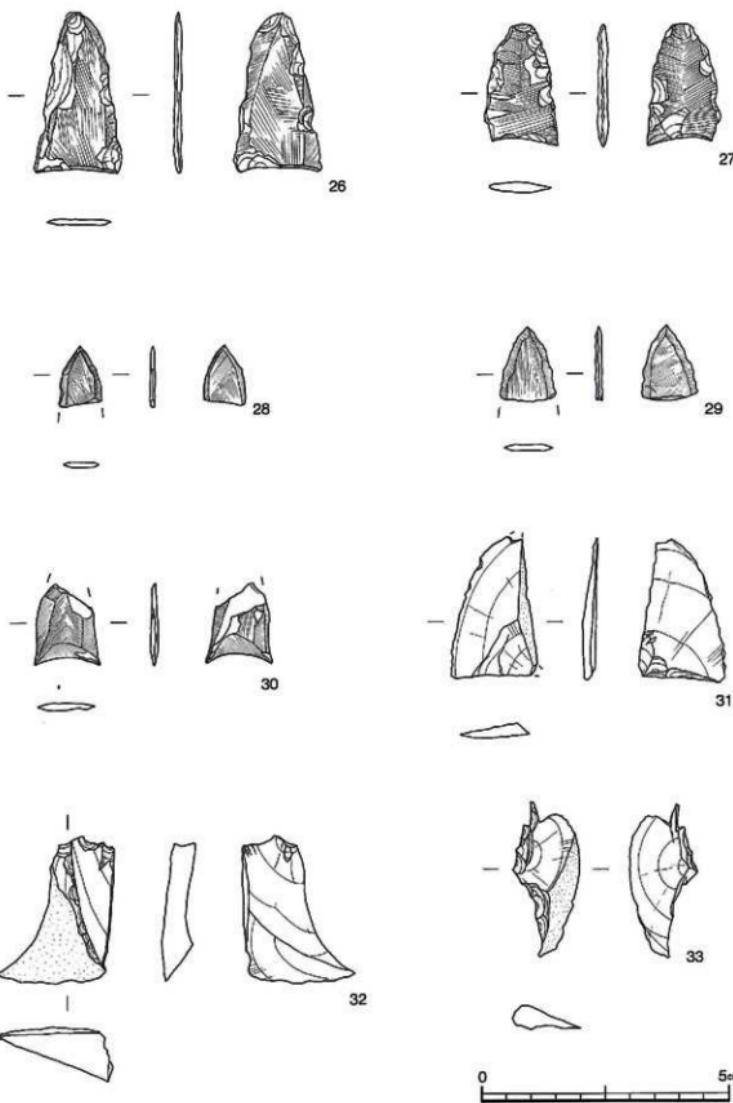
第33図 今平遺跡出土土器（2）



第34図 今平遺跡出土石器（1）

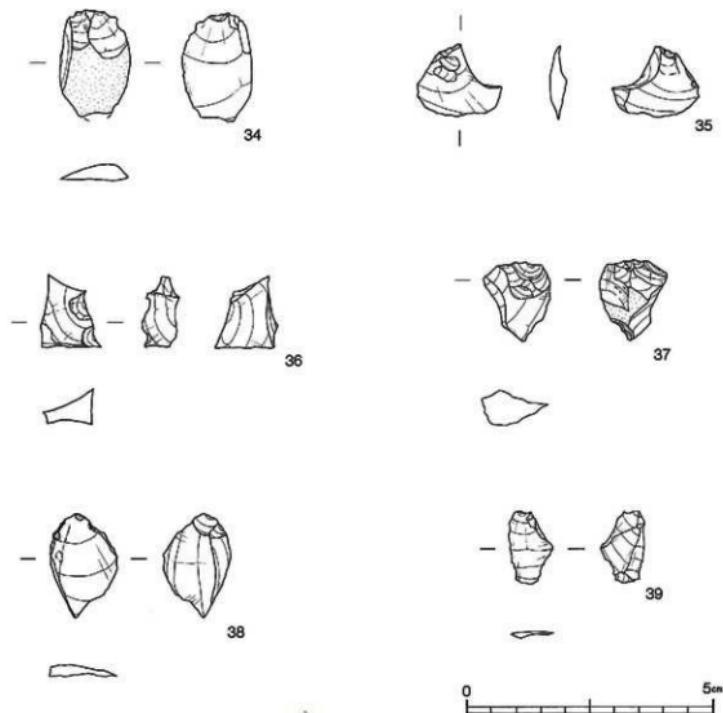


第35図 今平遺跡出土石器（2）

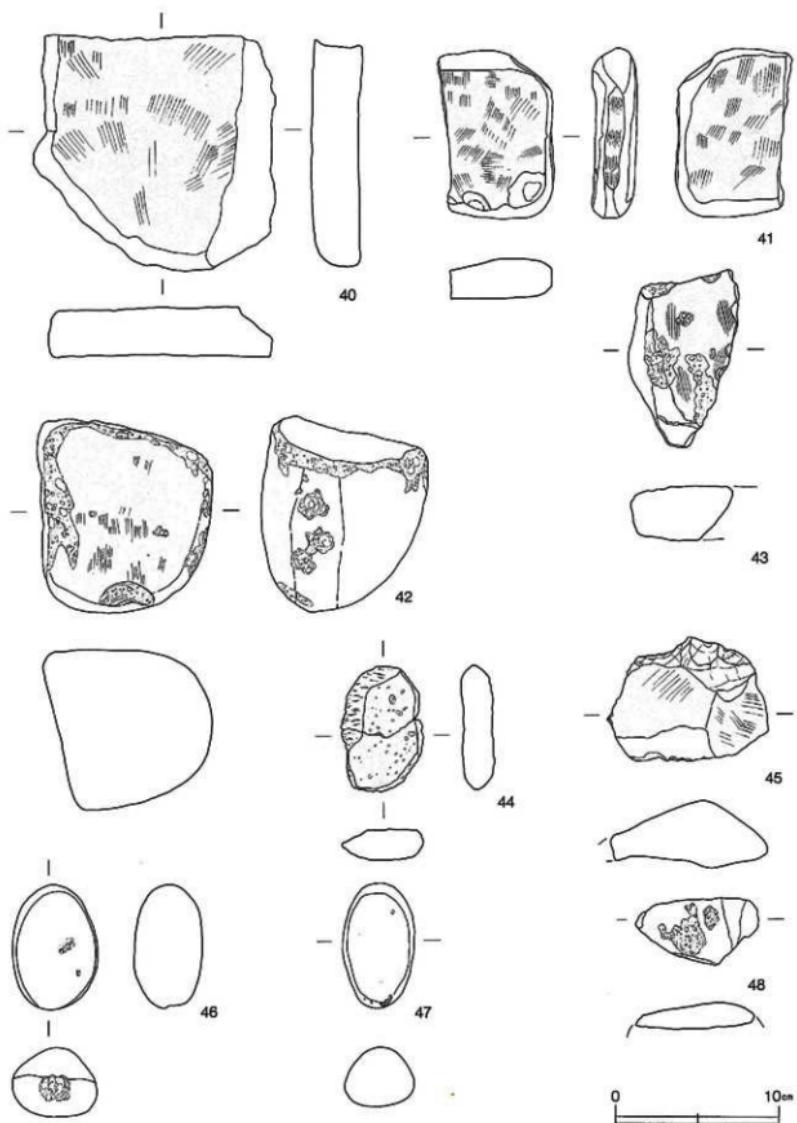


第36図 今平遺跡出土石器 (3)

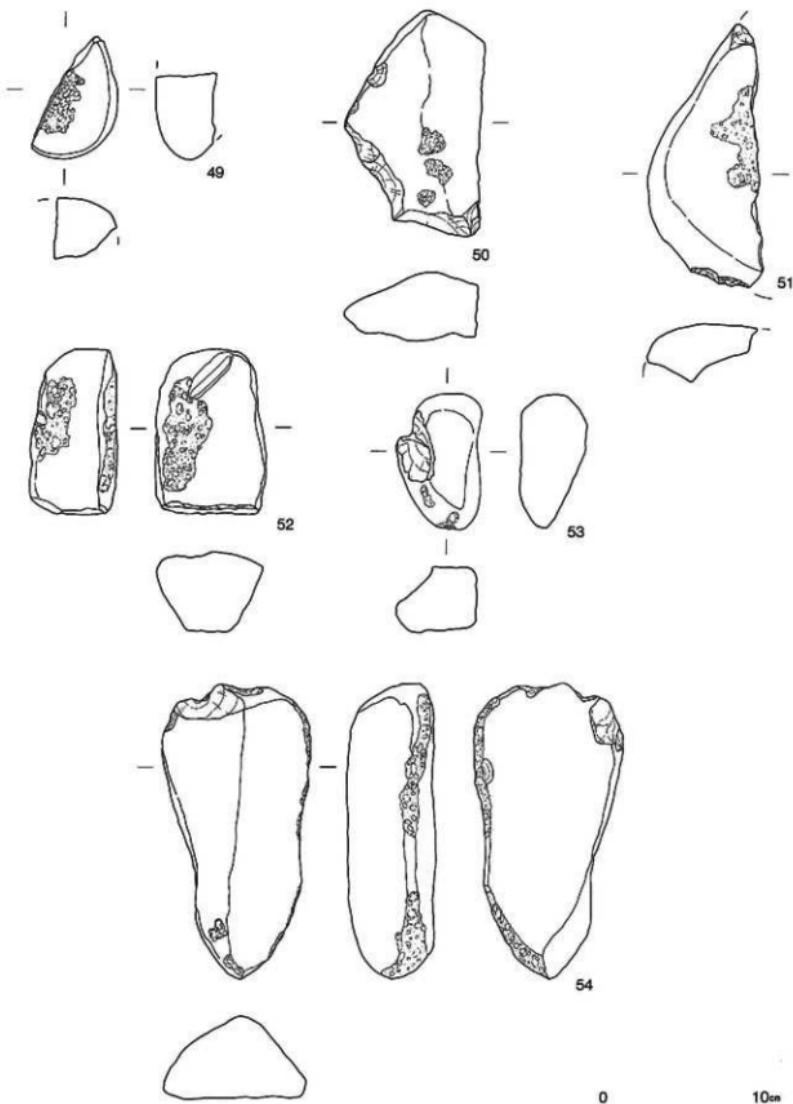
40~43は石皿である。44は軽石製石器で、1面磨面が見られる。45は磨石であるが、剥離痕が見られる。46~54は敲石である。50, 51には整形のためと思われる剥離痕が見られるが、51は残存する部位のみでは整形痕なのか使用による剥離痕なのか、判別しにくい。54は断面が三角形を呈する敲石で、側面に敲きを施している。上端には剥離痕が見られる。石材は、石皿、磨石、敲石いずれも砂岩である。



第37図 今平遺跡出土石器（4）



第38図 今平遺跡出土石器（5）



第39図 今平遺跡出土石器 (6)

第8表 今平遺跡 土器観察表

探査番号	遺物番号	出土区	層	色調	胎土	調整	文様	焼成	備考
32	2	A 2	IV	外面緑色 内面に赤い黄緑色	砂、長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条紋文 口唇部キザミ	良好	口縁部
32	3	A 1	IV	内外面に赤い黄緑色	砂、長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条紋文 口唇部キザミ	良好	
32	4	A 2	IV	外面緑色 内面に赤い黄緑色	砂、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条紋文 口唇部キザミ	良好	
32	5	A 6	IV	内外面に赤い黄緑色	砂、長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条紋文 口唇部キザミ	良好	
32	6	A 5	IV	内外面に赤い緑色	砂、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条紋文 口唇部キザミ	良好	
32	7	A 5	IV	内外面に赤い褐色	砂、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	—	良好	
33	8	A 5	IV	内外面褐色	砂、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条痕文	良好	底部
33	9	A 2	IV	内外面褐色	砂粒を多く含む。長石、石英、黒雲母、褐色土を含む。	内外面ナデ	—	良好	粘土付着か
33	10	A 2	IV	外表面緑色 内面に赤い黄緑色	砂、長石、石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条痕文	良好	
33	11	A 1	IV	内外面赤褐色	砂粒を多く含む。石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	貝紋条痕文	良好	
33	12	A 1	IV	外表面緑色 内面灰黃褐色	砂粒をとても多く含む。石英、黒雲母を含む。	内外面ナデ	—	やや軟質	

第9表 今平遺跡 石器観察表(1)

探査番号	遺物番号	器種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材	備考
35	13	石匙	A 3	IV	4.0	6.3	1.0	15.2	安山岩	
35	14	石匙	A 3	IV	2.7	1.75	0.6	2.2	安山岩	
35	15	スクレイパー	A 2	IV	4.3	2.1	1.1	10.9	安山岩	
35	16	石核	A 4	IV	2.8	2.65	0.9	8.2	安山岩	
35	17	スクレイパー	A 2	IV	1.7	1.55	0.65	1.0	安山岩	
36	18	打製石鎌	A 3	IV	2.2	2.0	0.42	1.3	安山岩	
36	19	打製石鎌	A 3	IV	2.2	1.45	0.3	0.7	安山岩	
36	20	打製石鎌	A 4	IV	3.05	1.8	0.4	1.3	安山岩	
36	21	打製石鎌	A 4	IV	2.55	1.55	0.45	1.1	黒曜石	姫島産
36	22	打製石鎌	A 2	IV	2.5	1.6	0.4	1.1	安山岩	
36	23	打製石鎌	A 5	IV	2.0	1.3	1.3	0.7	安山岩	
36	24	打製石鎌	A 4	IV	1.8	1.55	0.45	0.8	安山岩	
36	25	磨製石鎌	A 6	IV	2.5	1.4	0.2	0.6	隕石片岩	
37	26	磨製石鎌	A 6	IV	3.3	1.8	0.15	1.2	頁岩	
37	27	磨製石鎌	A 1	IV	2.5	1.5	0.2	1.1	頁岩	
37	28	磨製石鎌	A 2	IV	(1.25)	(0.85)	(0.1)	(0.2)	頁岩	
37	29	磨製石鎌	A 4	IV	(1.55)	1.15	0.15	(0.3)	頁岩	
37	30	磨製石鎌	A 8	IV	(1.55)	1.4	0.18	(0.5)	頁岩	
37	31	フレーク	A 3	IV	2.8	1.7	0.25	1.3	安山岩	
37	32	フレーク	A 3	IV	3.0	2.15	0.95	3.1	黒曜石	
37	33	フレーク	A 3	IV	3.2	1.4	0.45	1.1	黒曜石	
38	34	フレーク	A 2	IV	2.15	1.4	0.3	1.1	頁岩	
38	35	フレーク	A 3	IV	1.5	1.7	0.3	0.6	黒曜石	
38	36	石核	A 3	IV	1.45	1.25	0.75	1.0	黒曜石	
38	37	フレーク	A 3	IV	1.55	1.2	0.75	1.3	黒曜石	
38	38	フレーク	A 3	IV	2.1	1.35	0.23	0.5	黒曜石	
38	39	フレーク	A 2	IV	1.9	0.9	0.2	0.2	黒曜石	

第10表 今平遺跡 石器観察表(2)

掲番号	遺物番号	器種	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材	備考
33	1	敲石	3号土坑		(13.9)	(7.55)	5.1	(0.68)	砂岩	所々剥離痕あり
39	40	石皿	A8	IV	(14.5)	(14.75)	(3.1)	(1.07)	砂岩	
39	41	石皿	A8	IV	10.3	7.1	2.8	0.296	砂岩	
39	42	石皿	A10	IV	11.9	10.7	10.0	1.64	砂岩	
39	43	石皿	A4	IV	(10.85)	(6.85)	(3.7)	(0.295)	砂岩	
39	44	磨石	A2	IV	7.7	5.1	2.2	0.014	輝石	
39	45	磨石	A4	IV	(9.8)	(7.6)	(4.3)	(0.285)	砂岩	
39	46	敲石	A3	IV	7.6	5.2	4.2	0.187	砂岩	
39	47	敲石	A4	IV	7.6	4.35	3.7	0.154	砂岩	
39	48	敲石	A3	IV	(7.4)	(4.1)	(2.4)	(0.055)	砂岩	
40	49	敲石	A2	IV	7.6	5.25	3.8	0.146	砂岩	
40	50	敲石	A4	IV	(13.85)	(8.6)	(4.7)	(0.529)	砂岩	
40	51	敲石	A2	IV	(16.0)	(7.1)	(3.6)	(0.371)	砂岩	下部に剥離痕あり
40	52	敲石	A1	IV	(10.7)	(6.8)	(5.3)	(0.42)	砂岩	擦痕のようないわがあるが不明
40	53	敲石	A6	IV	8.3	5.0	4.2	0.215	砂岩	
40	54	敲石	A4	IV	18.0	9.1	5.4	0.981	砂岩	剥離痕あり

第11表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(1)

遺物番号	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	A2	IV	0.6	0.35	0.1	—	黒曜石	押圧剝離
2	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	黒曜石	押圧剝離
3	A2	IV	0.45	0.3	0.03	—	安山岩	押圧剝離
4	A2	IV	0.6	0.5	0.1	—	安山岩	押圧剝離
5	A2	IV	0.5	0.35	0.2	—	安山岩	押圧剝離
6	A2	IV	0.65	0.45	0.1	—	安山岩	押圧剝離
7	A2	IV	0.4	0.3	0.05	—	安山岩	押圧剝離
8	A2	IV	0.4	0.3	0.05	—	安山岩	押圧剝離
9	A2	IV	0.6	0.4	0.15	—	安山岩	押圧剝離
10	A2	IV	0.7	0.4	0.25	—	安山岩	押圧剝離
11	A2	IV	0.7	0.5	0.2	—	安山岩	押圧剝離
12	A2	IV	0.5	0.5	0.25	—	安山岩	押圧剝離
13	A2	IV	0.6	0.25	0.05	—	安山岩	押圧剝離
14	A2	IV	0.5	0.5	0.05	—	安山岩	押圧剝離
15	A2	IV	0.7	0.5	0.1	—	安山岩	押圧剝離
16	A2	IV	0.65	0.4	0.1	—	安山岩	押圧剝離
17	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	安山岩	押圧剝離
18	A2	IV	0.6	0.3	0.15	—	真岩	
19	A2	IV	0.75	0.6	0.25	—	黒曜石	
20	A2	IV	0.4	0.4	0.05	—	黒曜石	
21	A2	IV	1.25	0.95	0.7	0.2	黒曜石	
22	A2	IV	0.55	0.35	0.05	—	黒曜石	
23	A2	IV	0.45	0.35	0.03	—	黒曜石	
24	A2	IV	1.3	0.5	0.35	0.1	黒曜石	
25	A2	IV	1.4	0.9	0.45	0.3	黒曜石	
26	A2	IV	1.2	0.8	0.2	0.1	黒曜石	
27	A2	IV	1.5	0.9	0.15	0.2	黒曜石	
28	A2	IV	0.6	0.5	0.1	—	黒曜石	
29	A2	IV	0.8	0.8	0.3	—	黒曜石	
30	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	黒曜石	
31	A2	IV	0.5	0.4	0.05	—	黒曜石	

第12表 今平遺跡 A 2 区出土チップ観察表(2)

遺物番号	出土区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
32	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	黒曜石	
33	A2	IV	0.85	0.75	0.2	—	黒曜石	
34	A2	IV	0.7	0.45	0.15	—	黒曜石	
35	A2	IV	1.1	0.7	0.3	0.1	黒曜石	
36	A2	IV	1.55	0.7	0.45	0.2	黒曜石	
37	A2	IV	0.85	0.7	0.2	—	黒曜石	
38	A2	IV	0.8	0.8	0.35	0.1	黒曜石	
39	A2	IV	0.55	0.5	0.1	—	黒曜石	
40	A2	IV	0.5	0.4	0.05	—	黒曜石	
41	A2	IV	0.65	0.6	0.05	—	黒曜石	
42	A2	IV	0.8	0.35	0.1	—	黒曜石	
43	A2	IV	0.65	0.35	0.1	—	黒曜石	
44	A2	IV	0.9	0.6	0.2	0.1	黒曜石	
45	A2	IV	0.25	0.2	0.15	—	黒曜石	
46	A2	IV	0.65	0.5	0.1	—	黒曜石	
47	A2	IV	1.3	1.1	0.4	0.5	黒曜石	
48	A2	IV	0.9	0.55	0.25	0.1	黒曜石	
49	A2	IV	0.4	0.2	0.05	—	黒曜石	
50	A2	IV	0.35	0.2	0.05	—	黒曜石	
51	A2	IV	0.3	0.2	0.03	—	黒曜石	
52	A2	IV	0.3	0.25	0.03	—	黒曜石	
53	A2	IV	0.8	0.5	0.15	—	黒曜石	
54	A2	IV	1.6	0.9	0.25	0.3	黒曜石	
55	A2	IV	0.5	0.35	0.05	—	黒曜石	
56	A2	IV	0.3	0.2	0.03	—	黒曜石	
57	A2	IV	0.7	0.6	0.1	—	黒曜石	
58	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	黒曜石	
59	A2	IV	0.5	0.3	0.05	—	黒曜石	
60	A2	IV	0.25	0.2	0.03	—	黒曜石	
61	A2	IV	1.4	1.1	0.3	0.4	安山岩	
62	A2	IV	0.95	0.7	0.25	0.1	安山岩	
63	A2	IV	0.75	0.25	0.05	—	安山岩	
64	A2	IV	0.6	0.4	0.2	—	頁岩	
65	A2	IV	0.7	0.35	0.1	—	黒曜石	
66	A2	IV	0.8	0.5	0.15	—	安山岩	
67	A2	IV	0.55	0.4	0.03	—	安山岩	
68	A2	IV	0.5	0.25	0.03	—	安山岩	
69	A2	IV	0.3	0.2	0.03	—	安山岩	
70	A2	IV	0.3	0.25	0.03	—	安山岩	
71	A2	IV	1.4	0.6	0.25	0.1	安山岩	
72	A2	IV	1.35	1.1	0.4	0.4	安山岩	
73	A2	IV	0.85	0.7	0.25	0.1	安山岩	
74	A2	IV	0.6	0.4	0.15	—	安山岩	
75	A2	IV	1.6	1.2	0.3	0.3	安山岩	
76	A2	IV	0.55	0.35	0.2	—	安山岩	
77	A2	IV	0.3	0.15	0.1	—	頁岩	
78	A2	IV	0.6	0.45	0.2	—	安山岩	
79	A2	IV	0.45	0.3	0.15	—	安山岩	
80	A2	IV	0.6	0.55	0.1	—	安山岩	
81	A2	IV	0.6	0.4	0.1	—	安山岩	
82	A2	IV	0.55	0.4	0.1	—	安山岩	
83	A2	IV	0.7	0.45	0.2	—	安山岩	
84	A2	IV	0.7	0.6	0.2	0.1	安山岩	

第13表 今平遺跡 A 2 区出土チップ観察表(3)

遺物番号	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
85	A2	IV	0.7	0.3	0.15	—	安山岩	
86	A2	IV	1.0	0.7	0.25	0.1	安山岩	
87	A2	IV	0.65	0.45	0.1	—	安山岩	
88	A2	IV	0.55	0.35	0.1	—	安山岩	
89	A2	IV	0.7	0.5	0.2	—	黒曜石	
90	A2	IV	1.2	0.6	0.2	0.1	安山岩	
91	A2	IV	0.6	0.3	0.1	—	安山岩	
92	A2	IV	1.2	0.7	0.2	0.1	安山岩	
93	A2	IV	2.0	1.8	0.5	1.4	安山岩	
94	A2	IV	1.05	0.6	0.3	0.2	頁岩	
95	A2	IV	0.4	0.3	0.05	—	安山岩	
96	A2	IV	0.6	0.5	0.2	—	安山岩	
97	A2	IV	0.3	0.25	0.1	—	安山岩	
98	A2	IV	0.45	0.3	0.15	—	安山岩	
99	A2	IV	0.25	0.25	0.03	—	安山岩	
100	A2	IV	0.55	0.35	0.1	—	安山岩	
101	A2	IV	0.6	0.3	0.15	—	安山岩	
102	A2	IV	0.7	0.6	0.2	—	安山岩	
103	A2	IV	0.4	0.2	0.05	—	黒曜石	
104	A2	IV	0.5	0.25	0.05	—	安山岩	
105	A2	IV	0.9	0.5	0.2	—	安山岩	
106	A2	IV	0.5	0.3	0.05	—	安山岩	
107	A2	IV	0.35	0.3	0.05	—	安山岩	
108	A2	IV	1.2	0.75	0.5	0.2	安山岩	
109	A2	IV	0.3	0.2	0.05	—	安山岩	
110	A2	IV	0.85	0.65	0.15	—	安山岩	
111	A2	IV	0.45	0.35	0.1	—	安山岩	
112	A2	IV	0.7	0.4	0.2	—	安山岩	
113	A2	IV	0.85	0.35	0.15	—	安山岩	
114	A2	IV	0.4	0.4	0.05	—	安山岩	
115	A2	IV	0.8	0.55	0.1	—	安山岩	
116	A2	IV	0.4	0.3	0.05	—	安山岩	
117	A2	IV	0.7	0.55	0.2	—	安山岩	
118	A2	IV	0.55	0.45	0.1	—	安山岩	
119	A2	IV	0.7	0.4	0.15	—	頁岩	
120	A2	IV	0.65	0.5	0.3	—	黒曜石	
121	A2	IV	0.6	0.35	0.1	—	安山岩	
122	A2	IV	1.2	1.2	0.3	0.5	頁岩	
123	A2	IV	1.3	0.6	0.3	0.2	安山岩	
124	A2	IV	1.0	0.7	0.2	0.1	安山岩	
125	A2	IV	0.5	0.4	0.05	—	安山岩	
126	A2	IV	0.7	0.6	0.05	—	安山岩	
127	A2	IV	0.5	0.35	0.1	—	安山岩	
128	A2	IV	0.7	0.6	0.15	—	安山岩	
129	A2	IV	0.65	0.5	0.1	—	安山岩	
130	A2	IV	0.7	0.35	0.05	—	頁岩	
131	A2	IV	0.6	0.35	0.1	—	安山岩	
132	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	安山岩	
133	A2	IV	1.25	1.05	0.3	0.2	安山岩	
134	A2	IV	0.7	0.7	0.2	—	安山岩	
135	A2	IV	0.6	0.4	0.1	—	安山岩	
136	A2	IV	0.4	0.35	0.05	—	安山岩	
137	A2	IV	0.6	0.6	0.1	—	安山岩	

第14表 今平遺跡 A 2 区出土チップ観察表(4)

遺物番号	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
138	A2	IV	0.5	0.3	0.1	—	安山岩	
139	A2	IV	0.9	0.8	0.1	—	安山岩	
140	A2	IV	0.5	0.45	0.1	—	黒曜石	
141	A2	IV	0.7	0.6	0.2	—	安山岩	
142	A2	IV	0.35	0.25	0.1	—	安山岩	
143	A2	IV	0.8	0.5	0.15	—	安山岩	
144	A2	IV	0.5	0.35	0.05	—	安山岩	
145	A2	IV	0.5	0.4	0.1	—	頁岩	
146	A2	IV	0.7	0.45	0.25	—	安山岩	
147	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	安山岩	
148	A2	IV	0.75	0.5	0.25	—	安山岩	
149	A2	IV	0.65	0.4	0.2	—	安山岩	
150	A2	IV	0.55	0.45	0.2	—	安山岩	
151	A2	IV	0.75	0.5	0.2	—	安山岩	
152	A2	IV	0.4	0.3	0.1	—	安山岩	
153	A2	IV	0.6	0.3	0.1	—	黒曜石	
154	A2	IV	0.6	0.5	0.2	—	安山岩	
155	A2	IV	0.45	0.4	0.1	—	安山岩	
156	A2	IV	1.0	0.8	0.25	0.1	安山岩	
157	A2	IV	0.6	0.5	0.15	—	安山岩	
158	A2	IV	0.4	0.3	0.2	—	安山岩	
159	A2	IV	1.3	1.0	0.4	0.3	安山岩	
160	A2	IV	1.1	0.9	0.3	0.2	安山岩	
161	A2	IV	0.65	0.5	0.1	—	安山岩	
162	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	黒曜石	
163	A2	IV	0.4	0.4	0.05	—	安山岩	
164	A2	IV	0.6	0.5	0.15	—	安山岩	
165	A2	IV	0.7	0.5	0.1	—	安山岩	
166	A2	IV	0.4	0.25	0.05	—	安山岩	
167	A2	IV	0.6	0.4	0.05	—	安山岩	
168	A2	IV	0.95	0.7	0.15	—	安山岩	
169	A2	IV	0.8	0.6	0.15	—	安山岩	
170	A2	IV	0.5	0.45	0.1	—	安山岩	
171	A2	IV	0.85	0.7	0.2	0.1	安山岩	
172	A2	IV	1.9	1.1	0.3	0.4	安山岩	
173	A2	IV	0.7	0.6	0.15	—	安山岩	
174	A2	IV	0.3	0.2	0.03	—	安山岩	
175	A2	IV	0.5	0.35	0.05	—	安山岩	
176	A2	IV	0.9	0.6	0.25	—	安山岩	
177	A2	IV	0.7	0.65	0.15	—	安山岩	
178	A2	IV	1.9	0.7	0.4	0.4	安山岩	
179	A2	IV	1.0	0.7	0.4	0.1	頁岩	
180	A2	IV	0.85	0.5	0.25	—	安山岩	
181	A2	IV	1.5	0.5	0.2	0.1	安山岩	
182	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	安山岩	
183	A2	IV	1.5	1.15	0.5	0.6	砂岩	
184	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	安山岩	
185	A2	IV	0.8	0.7	0.4	0.2	安山岩	
186	A2	IV	0.35	0.2	0.05	—	安山岩	
187	A2	IV	1.7	1.0	0.8	0.6	安山岩	
188	A2	IV	0.8	0.65	0.15	—	安山岩	
189	A2	IV	2.15	0.8	0.2	0.3	安山岩	
190	A2	IV	1.7	1.5	0.7	1.0	安山岩	

第15表 今平遺跡 A2区出土チップ観察表(5)

遺物番号	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
191	A2	IV	0.6	0.5	0.15	—	安山岩	
192	A2	IV	1.5	0.8	0.4	0.3	安山岩	
193	A2	IV	0.7	0.6	0.1	—	安山岩	
194	A2	IV	1.5	0.8	0.4	0.3	真岩	
195	A2	IV	0.6	0.45	0.1	—	安山岩	
196	A2	IV	0.75	0.5	0.15	—	安山岩	
197	A2	IV	0.85	0.7	0.15	—	安山岩	
198	A2	IV	0.5	0.3	0.1	—	黒曜石	
199	A2	IV	1.0	0.8	0.3	0.2	安山岩	
200	A2	IV	0.7	0.7	0.1	—	安山岩	
201	A2	IV	0.7	0.5	0.05	—	安山岩	
202	A2	IV	0.8	0.65	0.3	0.1	真岩	
203	A2	IV	0.5	0.4	0.2	—	真岩	
204	A2	IV	1.15	0.8	0.25	0.1	安山岩	
205	A2	IV	1.3	1.2	0.3	0.4	安山岩	
206	A2	IV	0.9	0.5	0.3	0.1	真岩	
207	A2	IV	0.4	0.3	0.05	—	黒曜石	
208	A2	IV	1.15	0.8	0.2	0.1	安山岩	
209	A2	IV	0.6	0.5	0.1	—	黒曜石	
210	A2	IV	0.25	0.2	0.03	—	安山岩	
211	A2	IV	0.65	0.5	0.2	—	安山岩	
212	A2	IV	0.9	0.75	0.2	—	安山岩	
213	A2	IV	0.4	0.3	0.15	—	黒曜石	
214	A2	IV	0.65	0.35	0.2	—	真岩	
215	A2	IV	0.65	0.4	0.1	—	黒曜石	
216	A2	IV	0.65	0.25	0.15	—	真岩	
217	A2	IV	1.1	1.05	0.35	0.3	安山岩	
218	A2	IV	0.45	0.4	0.05	—	安山岩	
219	A2	IV	1.0	0.8	0.1	0.1	安山岩	
220	A2	IV	1.05	0.8	0.1	—	安山岩	
221	A2	IV	0.65	0.4	0.05	—	安山岩	
222	A2	IV	0.5	0.4	0.1	—	黒曜石	
223	A2	IV	0.6	0.6	0.1	—	安山岩	
224	A2	IV	0.9	0.5	0.15	—	安山岩	
225	A2	IV	0.75	0.6	0.2	0.1	安山岩	
226	A2	IV	0.6	0.5	0.1	—	安山岩	
227	A2	IV	0.85	0.6	0.15	—	安山岩	
228	A2	IV	0.5	0.4	0.15	—	安山岩	
229	A2	IV	1.2	0.85	0.3	0.2	真岩	
230	A2	IV	0.9	0.75	0.15	—	安山岩	
231	A2	IV	0.7	0.65	0.1	—	安山岩	
232	A2	IV	0.7	0.7	0.2	0.1	真岩	
233	A2	IV	0.9	0.8	0.4	0.1	泥岩	
234	A2	IV	1.4	0.8	0.4	1.0	真岩	
235	A2	IV	0.6	0.4	0.1	—	真岩	

第16表 今平遺跡 その他地区出土チップ観察表

遺物番号	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
1	A3	IV	0.4	0.35	0.1	—	黒曜石	
2	A3	IV	0.9	0.8	0.1	—	安山岩	
3	A3	IV	1.2	0.5	0.2	0.1	頁岩	
4	A3	IV	0.8	0.5	0.05	—	黒曜石	
5	A3	IV	0.5	0.3	0.1	—	黒曜石	
6	A3	IV	0.5	0.4	0.1	—	安山岩	
7	A3	IV	1.2	0.55	0.3	0.2	黒曜石	
8	A3	IV	0.45	0.3	0.05	—	黒曜石	
9	A3	IV	0.7	0.55	0.15	—	黒曜石	
10	A3	IV	0.75	0.6	0.1	—	黒曜石	
11	A3	IV	0.7	0.55	0.15	—	黒曜石	
12	A3	IV	0.4	0.3	0.03	—	安山岩	
13	A3	IV	1.3	0.9	0.35	0.2	黒曜石	
14	A3	IV	1.5	1.1	0.4	0.5	黒曜石	
15	A3	IV	1.45	1.3	0.45	0.7	黒曜石	
16	A3	IV	0.7	0.6	0.1	—	黒曜石	
17	A3	IV	0.5	0.25	0.03	—	黒曜石	
18	A3	IV	0.65	0.6	0.15	—	黒曜石	
19	A3	IV	1.3	0.5	0.25	—	黒曜石	
20	A3	IV	0.8	0.4	0.2	—	黒曜石	
21	A3	IV	2.0	1.2	0.4	0.7	砂岩	
22	A3	IV	1.4	1.2	0.6	0.7	砂岩	熱を受けている
23	A3	IV	1.2	0.9	0.45	0.4	砂岩	
24	A3	IV	1.2	1.15	0.1	0.1	黒曜石	
25	A3	IV	0.6	0.2	0.1	—	黒曜石	
26	A3	IV	1.05	1.0	0.15	0.2	安山岩	
27	A3	IV	0.75	0.5	0.1	—	黒曜石	
28	A3	IV	0.85	0.2	0.1	—	黒曜石	
29	A3	IV	1.2	0.5	0.15	0.1	安山岩	
30	A3	IV	0.4	0.35	0.05	—	黒曜石	
31	A3	IV	0.7	0.45	0.4	0.1	黒曜石	
32	A3	IV	1.8	0.9	0.35	0.3	黒曜石	
33	A3	IV	1.3	0.25	0.2	—	頁岩	
34	A3	IV	1.9	1.2	0.4	0.6	黒曜石	
35	A3	IV	0.6	0.45	0.1	—	黒曜石	
36	A3	IV	0.8	0.7	0.2	0.1	黒曜石	
37	A3	IV	0.6	0.3	0.1	—	黒曜石	
38	A3	IV	1.2	0.5	0.25	0.1	頁岩	
39	A3	IV	0.8	0.4	0.3	—	黒曜石	
40	A3	IV	1.7	1.4	0.4	0.7	黒曜石	
41	A3	IV	2.7	0.9	0.4	0.5	黒曜石	
42	A3	IV	1.75	1.3	0.45	0.7	黒曜石	
43	A3	IV	2.35	1.5	0.6	1.0	黒曜石	
44	A3	IV	1.5	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
45	A3	IV	0.5	0.3	0.03	—	黒曜石	
46	A3	IV	1.0	0.6	0.15	—	安山岩	
47	A3	IV	2.0	1.2	0.5	0.9	黒曜石	
48	A3	IV	1.8	1.4	0.25	0.5	安山岩	
49	A3	IV	0.6	0.5	0.05	—	黒曜石	
50	A1	一括	1.1	0.6	0.3	0.1	頁岩	
51	A2	IV	1.8	1.25	0.2	0.3	安山岩	
52	1号土坑		0.65	0.6	0.15	—	頁岩	
53	A3	IV	1.9	1.2	0.4	0.5	黒曜石	
54	A3	IV	2.1	1.7	0.6	1.1	黒曜石	
55	A4	IV	0.8	0.7	0.1	0.1	黒曜石	
56	A4	IV	1.9	0.8	0.4	0.3	黒曜石	姫島
57	A5	IV	0.7	0.5	0.05	—	安山岩	
58	不明		0.6	0.4	0.05	—	黒曜石	

第5節 小結

1 土器について

今回、今平遺跡から出土した土器はいわゆる小山タイプとも呼ばれているもので、胴部に幅広工具を用いたやや太い条痕文、口縁部にはキザミ目が施される。条痕文は斜位、横位に不規則に施されており、内面も調整による貝殻条痕が見られる。このタイプは、栗野町山崎B遺跡で出土した遺物から復元がなされており、口縁部が外反し底部が小さいが器形を呈するものと思われる。今平遺跡において平成7年度の確認調査で出土した土器は今回本調査で出土した土器と同じタイプの土器であるといえよう。本町においては、今平遺跡のほか、島間横峯遺跡、横峰C遺跡でも確認されている。このタイプの土器は吉田町小山遺跡のほか、志布志鎌石橋遺、栗野町山崎B遺跡、溝辺町小屋原遺跡、山神遺跡など鹿児島本土において見られるのみならず、長崎県国見町など九州各地で類例が増加している。このタイプはバリエーションが豊富で、型式内容や分布域などについて現在検討がなされつつある。

2 石器について

今平遺跡は320m²調査を行い、その中で石匙2点、スクレイバー2点、石核1点、打製石錐7点、磨製石錐6点出土しており、比較的集中して石器が出土していると言えよう。A2区においてはチップの集中区が確認され、何点か石錐などの石器が出土している。チップの中には押圧剥離によるものも見られるため、このポイントで石器を製作していたと思われる。A3区においても若干チップの集中して出土しており、製作場である可能性が考えられる。

石器に用いた石材は大きく4つに分類できる。1つは頁岩で、磨製石錐に用いられている。種子島でも良質の頁岩が入手できるため島内の頁岩を用いたと思われる。2つめは安山岩で、石匙やスクレイバーなどの他、打製石錐に用いられている。この安山岩は北西九州の安山岩に類似する。3つめは黒曜石である。黒曜石は打製石錐のほかフレークやチップに見られる。打製石錐には大分県姫島産のものと思われるものが見られ、フレークやチップには大分県腰岳産のものと思われるものが見られる。石皿・磨石・敲石には砂岩が用いられている。このように、石材に関しては頁岩や砂岩のように種子島内で入手できるものを用いているものと、安山岩、腰岳産と思われる黒曜石のような西北九州地域で入手できるもの、姫島産と思われる黒曜石の3つの地域に分けられる。このように、遠方から石材を入手して石器に用いる傾向は、横峯遺跡等ほかの島内遺跡でも見られる傾向である。

また、石錐においては打製石錐、磨製石錐いずれも様々な器形のものが見られるのも特徴的である。

第Ⅴ章 まとめ

第1節 龍庵坂遺跡

今回の調査で出土した土器は確認調査で91点、本調査で47点を数えた。しかし、大半は文様も判別できないような小片でローリングを受けていた。確認調査で出土した土器は、ほとんどが1トレンチからの出土であった。この1トレンチから出土した土器は、吉田式を中心として加栗山式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器と様々な時期の土器が出土している。本調査においては、平桟式土器が1点出土したのみで、文様が判別できる土器はすべて吉田式土器であると思われる。このことから、龍庵坂遺跡の中心的時期は吉田式土器の時期で、その前後にも連続して当時人々が生活していたと思われる。しかし、今回最も遺物の出土した1トレンチは本事業の計画路線からはずれており、遺跡の中心は今回調査した地点より東側にあると推測される。

石器においては、特筆すべきは2つの穿孔を持つ磨製石鎌である。今回の調査では龍庵坂遺跡、今平遺跡でそれぞれ1点ずつ磨製石鎌が出土した。穿孔のある磨製石鎌については、「現時点までの形態は全て種子島からの出土となっている。」(宮田 2003)とあるように、現時点では西之表古田二本松遺跡、須行園遺跡のほか、三角山I遺跡で2点確認されているのみである。今回龍庵坂遺跡で出土した磨製石鎌は、長さ3.9cmと長身で中央部に稜を持ち、基部から胴部にかけての幅はほとんど変わらず先端近くでカーブを描く形を呈する。基部の若干上部には2つ、回転による穿孔を施した後「ハ」字状に擦り切りによる溝を施している。龍庵坂遺跡で出土した磨製石鎌のようなタイプは種子島で見られる穿孔タイプにおいてもまだ同様の器形を持った磨製石鎌の出土例はない。先端部に欠損が見られるため使用されたと考えられ、装着の方法が穿孔1つのタイプと異なるのかもしれない。今後の類例の増加を待ちたい。

また、磨製石鎌は大半が頁岩製であるが今平遺跡で出土した磨製石鎌は緑泥片岩を用いており、他の磨製石鎌と石材を異にする。

なぜ種子島においてのみ穿孔された磨製石鎌が存在するのかは未だ不明である。今回出土した磨製石鎌は、こうした穿孔タイプの磨製石鎌について考える上で貴重な資料であると言えよう。

第2節 今平遺跡

今回の調査で土器は37点出土した。大半は小片で、文様の判別が出来なかった。型式が判別できたものはすべて小山タイプとも言われる、幅広工具で条痕文を施した土器であった。この型式の土器はバリエーションが多く、また分布域に関しても鹿児島本土のみならず九州各地で出土例が増加しつつある。よって、時期、分布域などに関しては今後の研究が待たれるところである。なお、本調査で出土したのはこの小山タイプとも言われる型式のみであったが、平成9年度に行った確認調査で、本調査から約35m南に位置する2トレンチから貝殻押引文を施した吉田式土器が出土している。石器の構成も、平成13年の本調査と同様、平成9年度の確認調査においても打製石鎌、磨製石鎌、磨石、敲石などが出土している。このことから、今平遺跡は、小山タイプとも言われる土器型

式の使われた特定の期間生活が営まれたのではなく、時間と異にして生活が営まれていたと考えられる。

遺構では土坑が3基のほか、チップ集中部が1カ所検出された。A2区のチップ集中部は石器の製作場である可能性が高い。今平遺跡で石器の石材に使われている石は砂岩、頁岩、安山岩、黒曜石の4種類で、安山岩、黒曜石は西北九州など種子島から遠隔地で入手されている可能性について前章で述べた。石鎌については打製石鎌が安山岩、黒曜石を用い、磨製石鎌が頁岩を用いている。A2区で出土しているチップの石材は、若干頁岩が見られるが大半は安山岩あるいは黒曜石であった。こうしたことから、石匙・打製石鎌等に使われた安山岩・黒曜石といった石材は、種子島から遠方の西北九州などの地域から原石で入手し、当地で製作していた様相が窺われる。

今回、今平遺跡において石器製作場と思われるチップの集中部が確認されたことは、種子島の縄文時代早期における交易の様相を考える上で大きな意味を持つと言えよう。

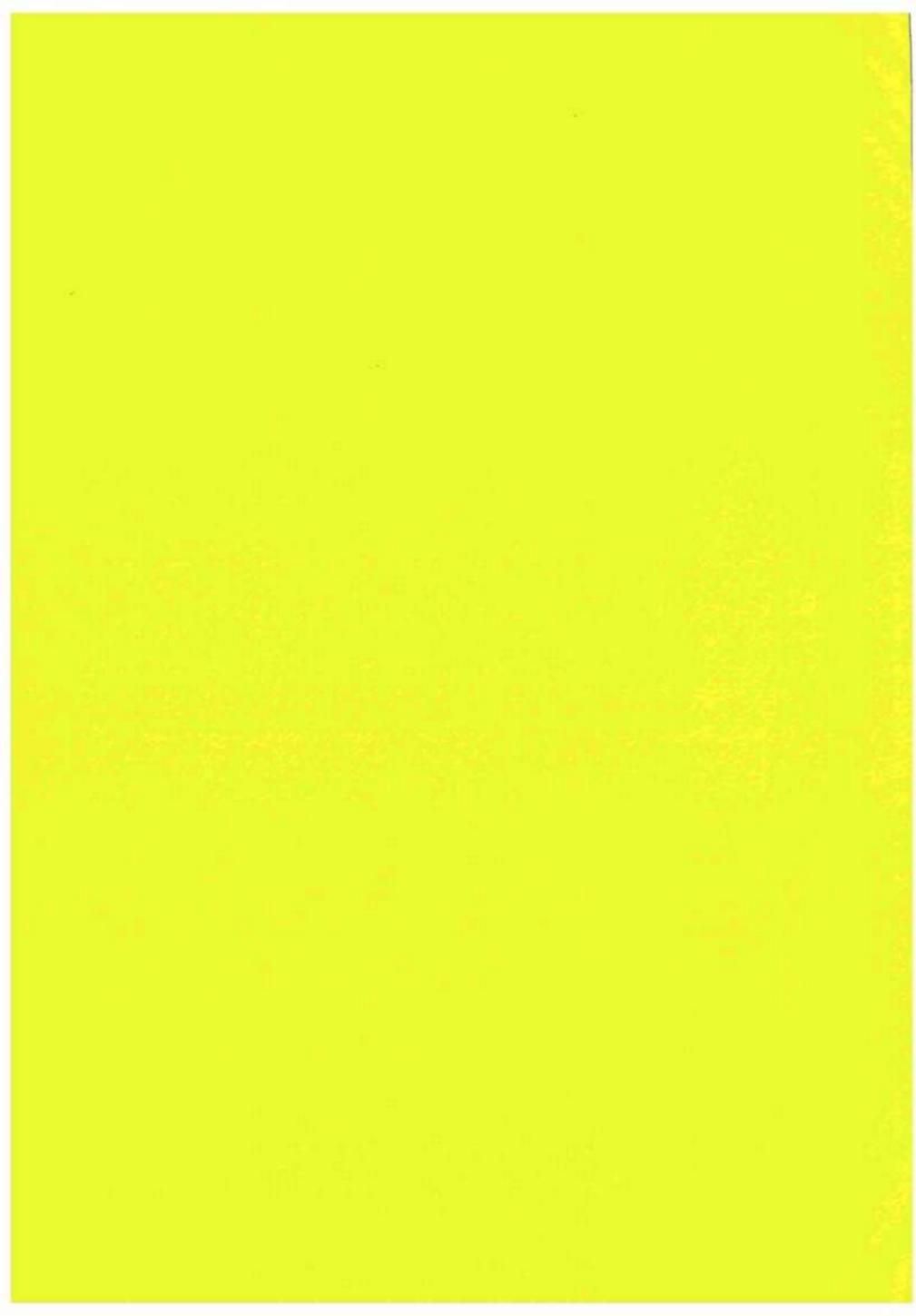
註1) 石器については、長野真一氏、馬龍亮道氏にご教示いただいた。

註2) 土器については、新東晃一氏、黒川忠広氏、横手浩二郎氏にご教示いただいた。

参考文献

- 新東晃一 1987 「南九州のアカホヤ火山灰と前後の土器型式」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』
第22回埋蔵文化財研究会
高橋信武 1989 「嘉式土器再考」『考古学雑誌』第75巻第1号
重富康宏 2002 「縄文時代早期末の条痕文土器（予察）」『宮崎考古』第18号
橋口尚武 1990 「種子島の考古学的研究—その基礎資料（1）—」
黒川忠広 2002 「南九州貝殻文系土器」南九州縄文研究会
宮田栄二 2003 「縄文時代早期の磨製石鎌について」『研究紀要 縄文の森から 創刊号』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 「三角山I遺跡－不思議な穴のある矢じりー」『埋文だより』第22号
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996 「牛之原遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（18）
西之表市教育委員会 1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
南種子町教育委員会 1996 「石ノ半遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

図 版





龍庵坂遺跡 近景



龍庵坂遺跡 土層断面

図版2



龍庵坂遺跡
遺跡出土狀況



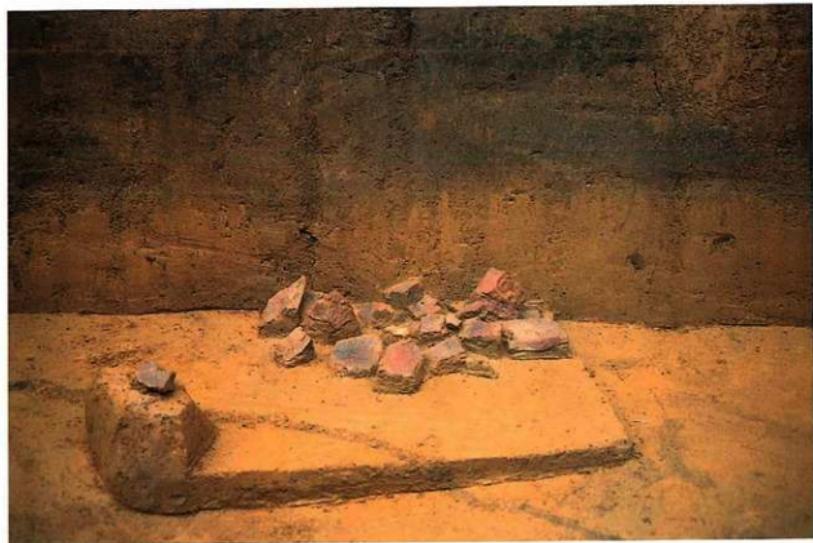
龍庵坂遺跡
出土石劍



発掘風景



橋久保遺跡 近景



橋久保遺跡 瓦群



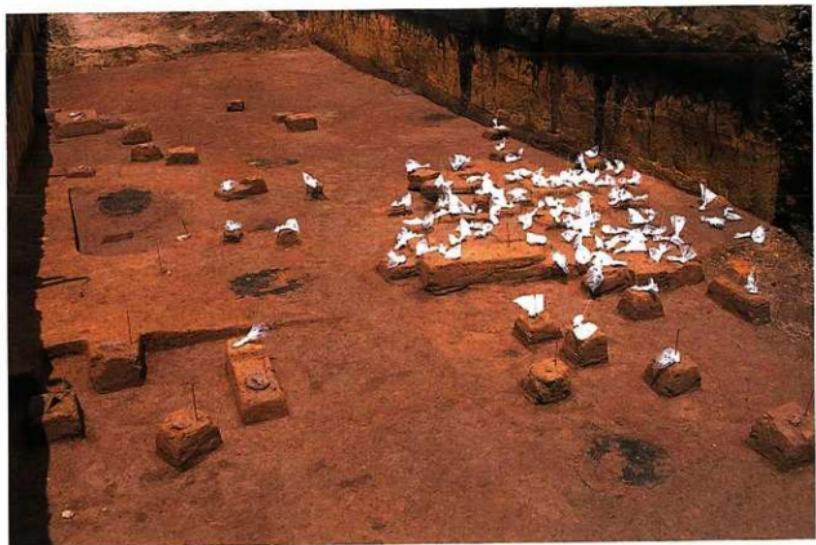
今平遺跡 近景



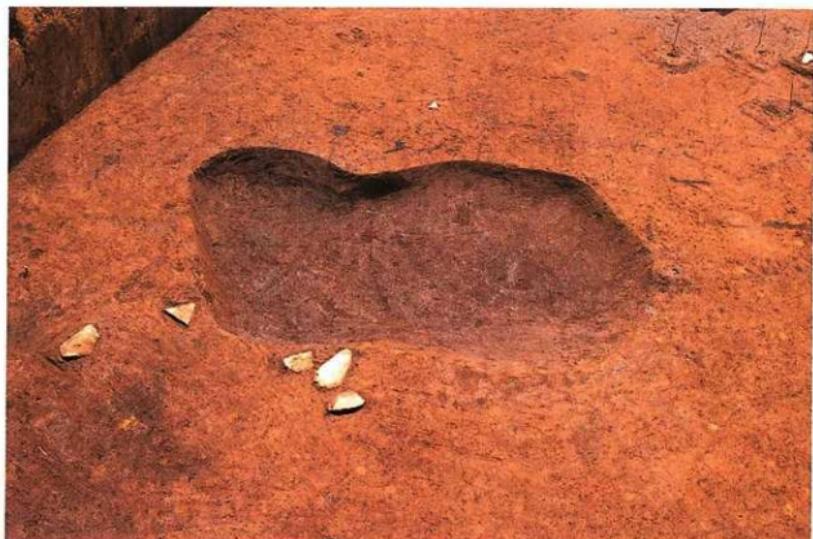
今平遺跡 土層断面



今平遺跡　造物出土状況



今平遺跡　チップ集中部



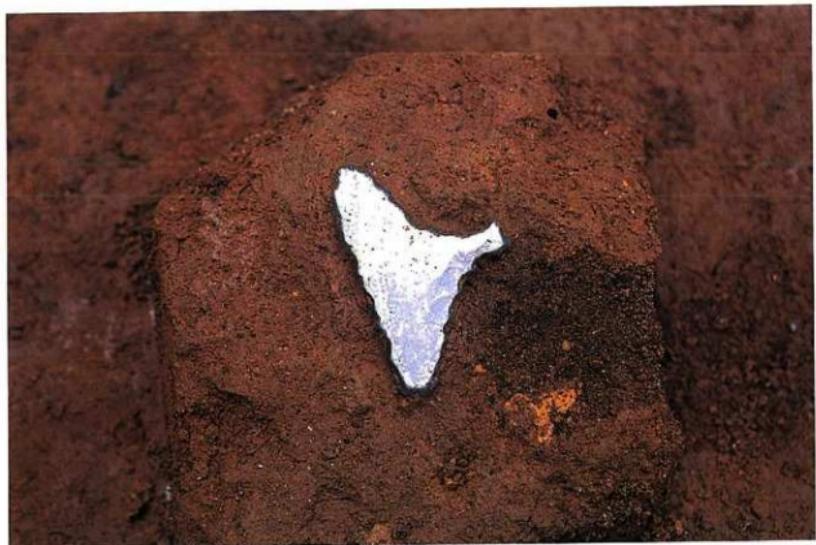
今平遗址 1号土坑



今平遗址 2号土坑



今平遺跡 3号土坑



今平遺跡 出土石匙



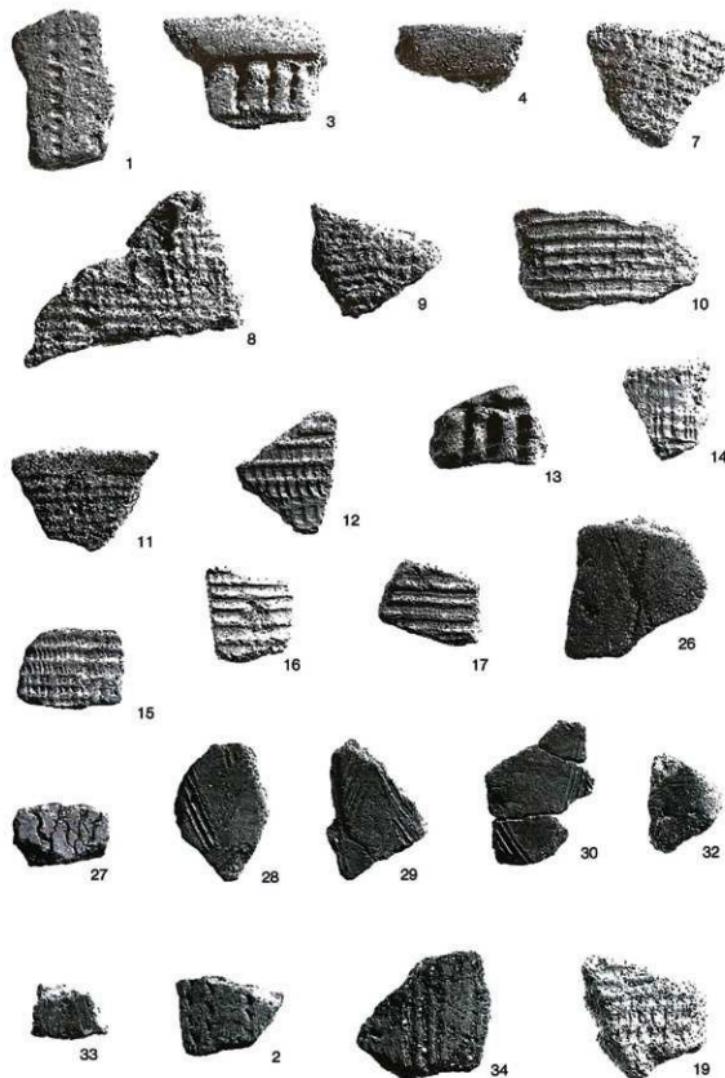
今平遺跡
チップ集中部出土石錠



今平遺跡
遺物出土状況



発掘風景



龍庵坂遺跡 土器（1）



龍庵坂遺跡 土器 (2)



平成9年度今平遺跡 土器



35



35



37



39



40

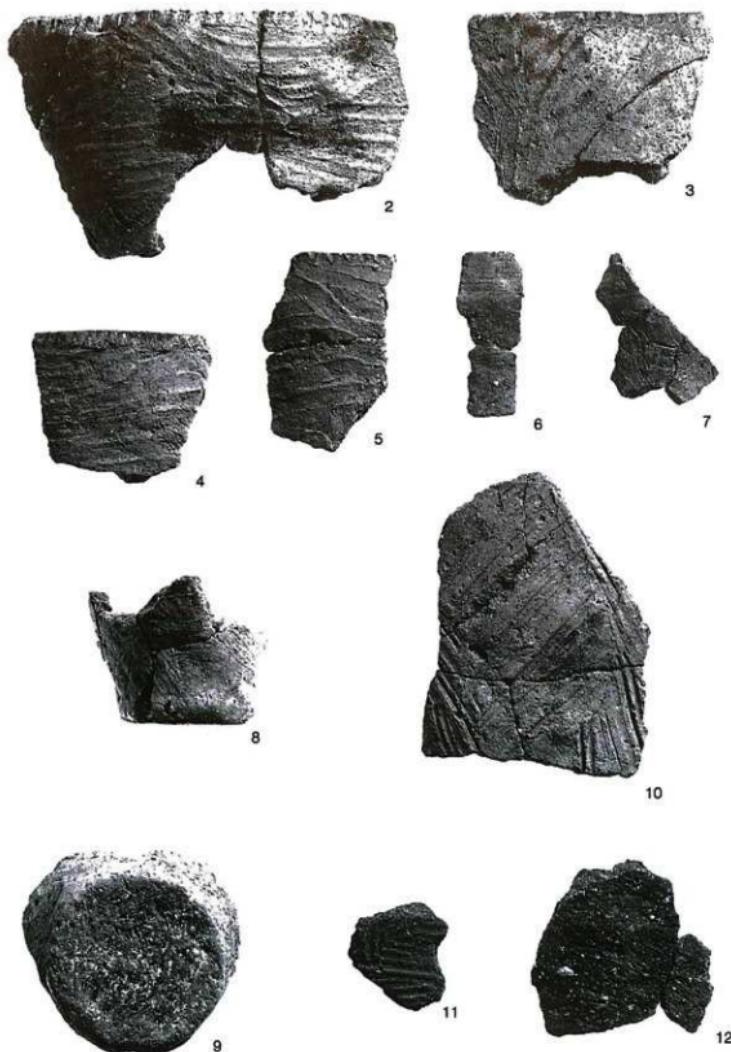


38



44

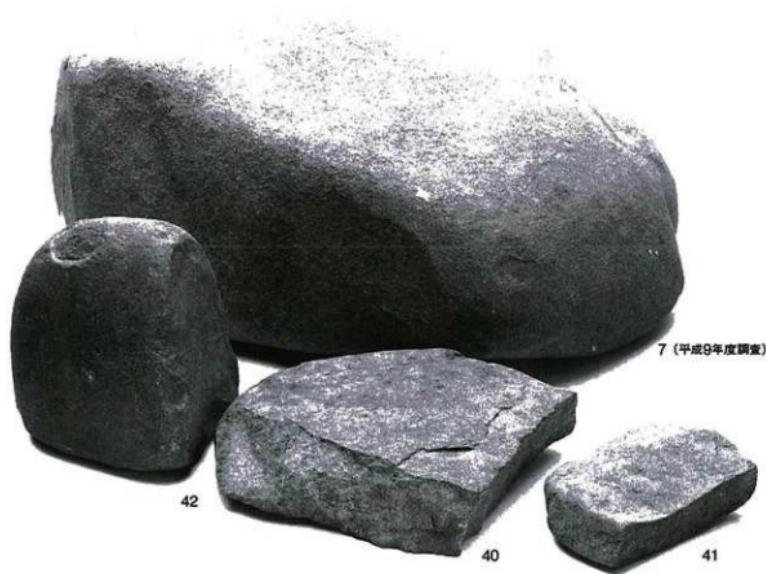
龍庵坂遺跡 石器



今平遺跡土器

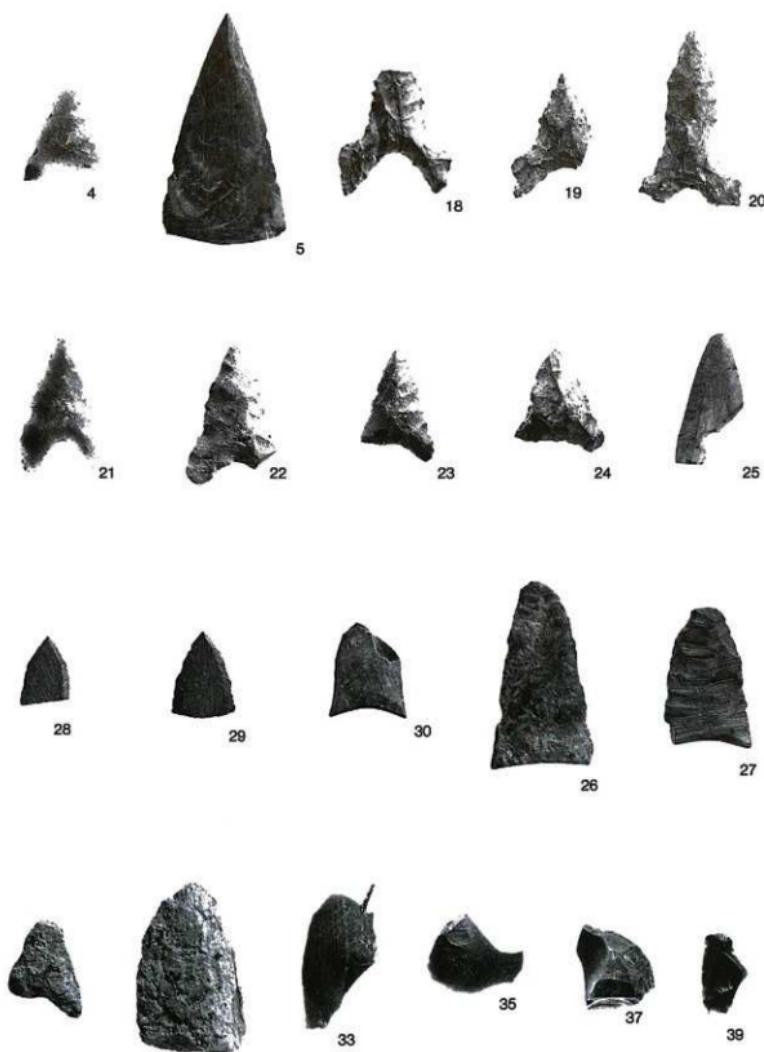


(平成9年度調査)



7 (平成9年度調査)

今平遺跡 石器 (1)



今平遺跡 石器 (2)

(4. 5は平成9年度調査)



今平遺跡 石器（3）

（8は平成9年度調査）



あとがき

「龍庵坂遺跡・今平遺跡」は、南種子町に来て初めて手かける報告書であった。遺物の量は非常に多いというわけではなかったが、土器のバリエーションも多様で、石器に遠方から入手した安山岩や黒曜石を使っていることなど、種子島の考古学のおもしろさを改めて実感した。

慣れない報告書作成に要領がなかなか分からず、当遺跡の調査を行った前担当者の坂口さん、整理作業員や埋蔵文化財センターの方々、山口さんをはじめとする出版社の方々にはご迷惑をおかけした。多くの方々の協力により報告書を刊行することが出来、心から感謝する次第である。

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書00

龍庵坂遺跡・今平遺跡

発行日 2004年3月

発行者 南種子町教育委員会

〒891-3792

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1

Tel 0997-26-1111

印刷所 株式会社 トライ社

〒891-0834

鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6

Tel 099-226-0815



今平遺跡からH-IIAロケットを見る